

# 東広島市丸山神社古墳群の測量調査

藤野次史

## 1. はじめに

丸山神社古墳群は、東広島市西条町助実 405 番地に所在する。丘陵先端部に 3 基の古墳が築造されており、前方後円墳 1 基、円墳 2 基で構成される。丸山神社境内に隣接して位置しており、1990 年頃神社西側の丘陵一帯の下刈りが行われた際に吉井宣子氏（当時、広島大学埋蔵文化財調査室職員）によって第 1 号古墳が発見された。その後、広島大学文学部考古学研究室潮見浩教授、同川越哲志助教教授、古瀬清秀助手、広島大学埋蔵文化財調査室河瀬正利助教教授、同藤野次史助手が現地を訪れ、神社西側に隣接する古墳（第 1 号古墳）は全長約 40 m の前方後円墳の可能性が高いこと、第 1 号古墳の西側の丘陵先端に墳丘をかなり削平された円墳（第 2 号古墳）が存在することを確認した。

丸山神社古墳群は西条盆地（狭義）の北西部に位置し、白市盆地から西条盆地に通じる通路近くに位置すること、西条盆地（狭義）で新たに確認された前方後円墳であること、墳丘に隣接して壺形埴輪が採集されていることなど、西条盆地および周辺地域の古墳時代を究明する上で重要な古墳であると考えられたことから、埋蔵文化財調査室、考古学研究室の協力を得て測量調査を実施することとした。測量調査は、丸山神社境内東側の通路一帯で弥生土器、須恵器などが多数採集されていたことから、遺物採集地点を含めて測量することとし、1991 年 3 月 4 日～7 日、3 月 18 日～21 日、3 月 23・24 日、3 月 27 日～4 月 1 日に実施した。調査の参加者は、安間拓巳、池淵俊一、新海正博、竹広文明（以上、広島大学大学院文学研究科）、田中規子、野嶋洋子、猪原千恵、沖憲明、高添千代子、中島信親、大鳥居仁、増田直人（以上、広島大学文学部）、高島豊（広島大学教育学部）、吉井宣子、藤野次史（以上、広島大学埋蔵文化財調査室）である（括弧内の機関名は、すべて当時の所属）。

測量調査後の 1991 年 9 月、台風 19 号により丸山神社社殿北側の檜が倒木し、檜の根に抱きかかえられるように、箱式石棺が露出した。この事態に対処するために東広島市教育委員会によって緊急調査が実施された（石井 1993）。古墳の内部主体である

ことが確認され、丸山神社第3号古墳と呼称することとした。第3号古墳は第1号古墳の東側に隣接し、第1号古墳後円部北西部と裾を接するように位置している。

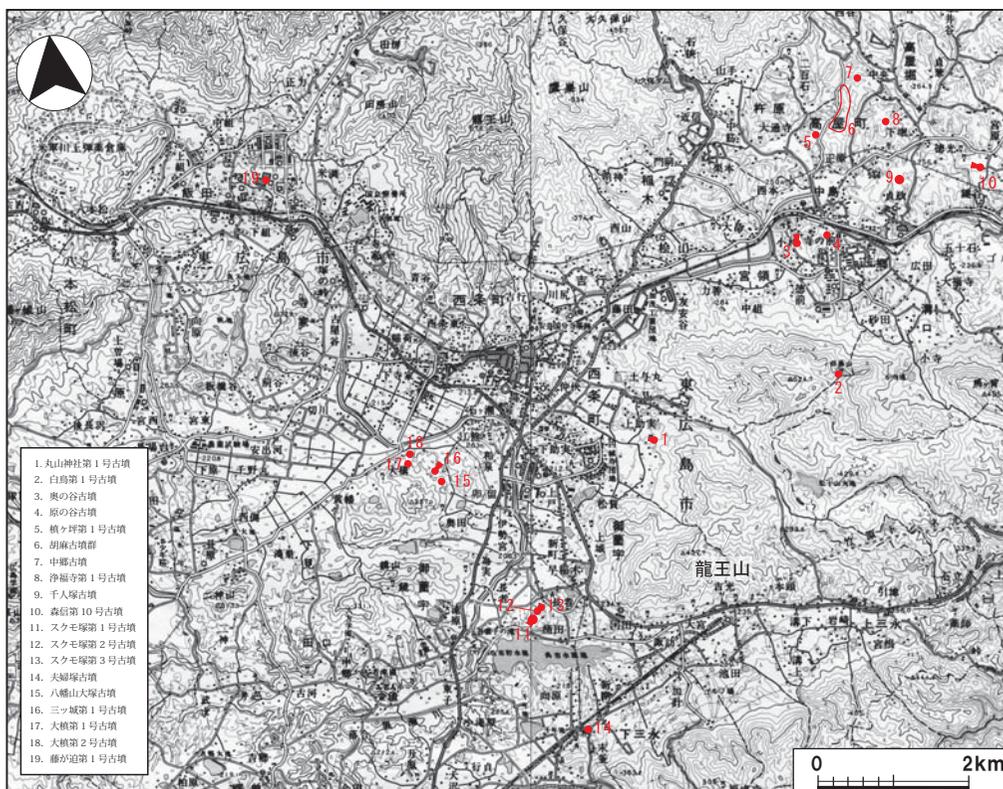
本稿では、丸山神社古墳群の測量報告を中心に、第1号古墳裾に立てられていたと考えられる壺形埴輪を紹介し、古墳群の時期について若干の考察を試みたい。また、丸山神社境内および境内に隣接した地点で採集された遺物をあわせて報告する。報告の資料は吉井宣子氏が主に採集したものであるが、大川泰広氏（遺物採集当時は広島大学大学院文学研究科に所属）が採集したものを一部含んでいる。

## 2. 丸山神社古墳群の立地と西条盆地の古墳

丸山神社古墳群はほぼ東西に主軸をもつ低丘陵の西半部（丘陵先端側）に立地し、標高は240～244 mである（第29図）。周辺の水田面との比高差は約20 mである。丘陵平坦部は東西約200 m、南北約60 mの規模であるが、丘陵東部に南北に延びる谷が深く入り込み、丘陵を東西に二分しているような形となっている。谷頭の南側に平坦部がわずかに残されているが、現在、この谷の中央部に神社へ通じる道路が敷設されており、実質的には谷の西側と東側で別々の丘陵のような地形を呈している。

丸山神社古墳群が立地する丘陵の背後（東側）は西条盆地（狭義）の東縁を形成する山塊で、標高457.4 mの龍王山を中心に標高410～450 m前後の山頂部が南北に連なっている。また、北側は西条盆地の北縁東端部をなす山塊が迫っている。北側の山塊は同時に西条盆地と白市盆地の境界をなすものであり、標高453 mの白鳥山とその周囲の標高500 m前後の山頂が連なっている。西条盆地の北縁東端部をなす山塊と西条盆地東縁部の龍王山を中心とする山塊の間には深い谷が形成され、この谷の底部を旧山陽道（西国街道）が貫通している。丸山神社古墳群の東側に位置する山頂部は龍王山の北側に位置し、標高451 mを最高所としていくつかの山頂部を形成している。北側は、上述のごとく、深い谷が形成され山麓部は急斜面を形成しているが、西側は中腹あたりから比較的緩やかな尾根筋となり、山麓部は丘陵地帯を形成している。丘陵は西～西北西に延びており、標高260～280 mに平坦部を形成している。

丸山神社古墳群の立地する低丘陵は標高240 m台で、上述の丘陵より一段低い地形面である。丸山神社古墳群の立地する丘陵と同程度の標高を示す低丘陵は北側隣接地や南側の龍王山西側山麓裾などに点々と認められる。北側隣接地の低丘陵は東西方向を主とする細長い地形で、平坦部は東西約800 m、南北約100 mの規模である。この低丘陵は湖成段丘面に比定されており（中田1989）、丸山神社古墳群が立地する低丘



第28図 西条盆地における前期・中期古墳分布図（本稿関連古墳のみ）



第29図 丸山神社古墳群周辺の地形  
 (1. 第1号古墳、2. 第2号古墳、3. 第3号古墳)

陵を含め、同程度の標高を示す平坦面は湖成段丘面の可能性が高い。

ところで、丸山神社古墳群からの眺望であるが、北側は上述の低丘陵が近接して位置していることから視界が塞がれており、白鳥山南麓やその南側に広がる小規模な谷平野はまったく見通すことができない（図4-4）。また、西側には標高272mを最高所とする小山が位置する（図4-5）。宅地造成によって旧地形は大きく失われており、造成が行われる前にはさらに標高が高かったようである（以下、円城寺山と仮称）。円城寺山は東西に裾野が広がっており、西側に広がる西条盆地低地部の眺望の大半を遮っている。南側は龍王山から西へ伸びる丘陵が大きく張り出しており、西条盆地南部の遠望を遮っている（図4-6）。したがって、古墳群からの眺望はこのほか狭く、北側の低丘陵、古墳群背後（東側）の丘陵地帯、西側の円城寺山、南側の龍王山から張り出した丘陵に囲まれた低地部にほとんど限られている。基本的には丸山神社古墳群周辺の低地以外は西条盆地を形成する山塊が遠望できるのみである。

次に、丸山神社古墳群が位置する西条盆地（広義。以下、とくに断らない限り、狭義の西条盆地および白市盆地、志和盆地、黒瀬盆地を含めた地域を指す。）における前期～中期の古墳について概観してみたい。現状では前期の古墳は高屋地区や西条地区北東部を中心に分布が認められる。これらの地域は弥生時代後期において大規模な集落遺跡が集中的に発見されており、弥生時代後期以降、継続的に政治勢力が発展したことを示している。

西条盆地において最古に位置づけられるのは高屋地区西端部に位置する才が迫第1号古墳（大上1993）である。一辺約10mの方墳で、2基の竪穴式石室を内部主体とする。第1主体から鉄剣1、銅鏃1、瑪瑙勾玉2、碧玉管玉7、珪質凝灰岩管玉1、第2主体から鉄剣1、鉄槍1、鉄鑿1、鉄斧1、不明鉄器1が副葬品として出土した。また、墳丘北側の溝から土師器（脚付壺、壺、鉢、高坏）が出土した。古墳時代初頭に位置づけられる。後続する古墳としては高屋町原の谷古墳（出野上編著2003）、白鳥古墳（松崎1979a）がある。原の谷古墳は大きく削平を受けており詳細は不明である。方墳または長方形墳の可能性が考えられており、南北約30m、高さ約1.7mの規模である。竪穴式石室を内部主体とするが、ほとんど削平された状態で、副葬品も確認されていない。墳丘構築直前の旧表土出土の土器の時期などから前期前半に位置づけられる。白鳥第1号古墳は標高453mの白鳥山山頂に立地し、高屋地区、白市地区を一望できる位置にある。明治期の神社改築に伴って破壊されたため、墳形、内部主体などは不明で、沓製三角縁三神三獣鏡2、碧玉勾玉1、鉄素環頭太刀1が出土遺物と

して伝えられている。前期後葉～末に位置づけられる。これらの古墳は西条盆地の有力首長墓と考えられるが、この他にも前期に位置づけられる古墳は高屋地区を中心に、志和地区などで認められる。いずれも、10m程度の小規模な墳丘で、竪穴式石室、箱式石棺、粘土槨などを内部主体している。高屋地区では、槨ヶ坪第1号古墳（大田編1988）がある。槨ヶ坪は丘陵の前後を溝で区画されたのみの墳丘で、南北15m、東西7m、高さ0.8mの規模である。内部主体は箱式石棺1、土壙（木棺直葬？）1で、副葬品は検出されていない。溝から出土した土師器から前期後半に位置づけられる。志和地区では蛇迫古墳群（恵谷編2005）がある。直径10～14mの円墳4基からなり、粘土槨、箱式石棺などを内部主体とする。第1号古墳は丘陵の先端に位置し、内部主体は、粘土槨1、箱式石棺2で、粘土槨の墓壙を切って箱式石棺が構築されている。粘土槨から鉄刀子1、ガラス小玉1が出土し、溝から土師器が出土した。粘土槨の構築法や出土土師器から前期末に位置づけられる。第2号古墳は粘土槨を内部主体とし、鉄刀子2、鉈2などが出土した。そのほかの古墳では出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、第1号古墳に後続して順次丘陵の上方に向かって構築されたと想定されている。八本松地区では藤が迫第1号古墳（河瀬1971）がある。直径約13mの円墳と推定され、竪穴式石室を内部主体とする。石室はほとんど破壊された状態であるが、小口積が確認でき、控え積の規模も大きい。前期に属する可能性がある。また、前期では墳丘を持たず、箱式石棺墓、土墳墓などが密集して構築される胡麻4号遺跡（梅本1990）などの例が知られている。胡麻4号遺跡は弥生時代後期末～古墳時代初頭に位置づけられるが、蔵田1号遺跡（葉杖1994）など、墳丘を持たず、箱式石棺が群集する例は中期以降も継続しており、古墳時代を通じて存在する在り方と考えられる。

西条盆地では、オケ迫第1号古墳、原の谷古墳、白鳥古墳第1号などの墳丘規模、内部主体、副葬品などの点で抜きん出た内容を持つ古墳の存在とともに、副葬品をほとんど有さず、10m程度の小規模な古墳、さらには墳丘を持たない墳墓群の3者が認められ、前期における政治集団の階層性を垣間見ることができる。

中期では、千人塚古墳<sup>(1)</sup>（松崎・潮見1961、古瀬編2010）が初期に位置づけられる。千人塚古墳は直径約24m、高さ約2mの円墳で、内部主体は箱式石棺3である。第1号箱式石棺は大型厚手の側石2枚ずつで構成され、粘土を用いて丁寧に構築されている。出土品として、珠文鏡1、勾玉3、碧玉製管玉6が知られており、副葬されていたと考えられる。前期末～中期初頭に位置づけられ、白鳥第1号古墳に後続する有

力首長墓と考えられる。副葬品から見ると前期古墳的な様相を持つ。しかし、白市盆地中央部の低丘陵上に立地し、古墳から低地部への眺望はある程度広がっているものの、低地側からの古墳の視認性は必ずしもよくない。内部主体は箱式石棺で、第1号主体は三ッ城第1号古墳に通じる構造が指摘されており（古瀬編 2010）、立地や内部主体は中期古墳の様相を示している。

その後、中期前半には西条盆地に50mを超える大型前方後円墳が突如出現する。西条町スクモ塚第1号古墳は帆立貝式の前方後円墳で、全長63mの規模である（松崎 1979c）。発掘調査が実施されていないため詳細は不明であるが、墳丘には葺石、埴輪がめぐっており、中期前葉に位置づけられる。スクモ塚第1号古墳と同じ丘陵上にスクモ塚第2号・第3号古墳が築造されている（松崎 1979c）。スクモ塚第1号古墳に後続するものと思われ、中期中葉～後葉に位置づけられる。西条中央の三ッ城第1号古墳は三段築成の前方後円墳で、全長92mの規模を有する（石井編 2004）。左右くびれ部に作り出しを有し、墳丘には円筒埴輪、朝顔形埴輪をめぐらせている。また、上部2段には葺石を施している。内部主体は、竪穴式石槨2（第1号・第2号主体）、箱式石棺1（第3号主体）で、第1号主体に珠文鏡1、勾玉1、管玉17、鉄刀2など、第2号主体に銅釧1、勾玉1、丸玉2、縦櫛4、鉄刀1、鉄刀子2など、第3号主体に勾玉1、棗玉1、丸玉3、鉄剣1などが副葬されていた。中期中葉に位置づけられる。スクモ塚第1号古墳、三ッ城第1号古墳は西条盆地全体を統括したと考えられる有力首長墓で、三ッ城第1号古墳の被葬者は安芸地方を広く統括した首長墓と想定されている（松崎 1979d など）。スクモ塚第1号古墳は西条盆地南東部、三ッ城第1号古墳は西条盆地中央部に位置しており、前期古墳の存在が明らかでない地域に新たに出現している。その背景には、大和政権やそれに連なる安芸地方の政治的動向が関連するものと予想されるが、現状では具体的に考察できる状況ではない。三ッ城第1号古墳の後には、高屋地区に全長30m前後の前方後円墳である森信第1号古墳（石井 1990）、奥の谷古墳（東広島市教育委員会 1989）が築造されているが、大型古墳の築造は途絶えている。

中期においても前期と同様に、直径あるいは一辺が10～15m前後の小規模な古墳が築造されている。高屋地区では、木原向山古墳群（金井 1975）、胡麻第5～7号古墳（青山 1990）、中郷古墳（三保・梅本 1994）、浄福寺1号古墳（妹尾 1993）などが調査されている。これらの古墳は削平されて内部主体の不明なものが多いが、確認されているものでは箱式石棺を中心としている。副葬品は検出されていないものも多く、

副葬品が認められる場合でも鉄鏃が少量出土する程度である。高屋地区のほかにも、前期古墳の存在が明確ではなかった西条盆地各地で古墳を確認することができる。内容が明らかな古墳は西条地区東南部の西条町御園宇南部や西条町下三永、西条地区中央部の西条中央や下見で知られており、前者では、スクモ塚第2号・第3号古墳（松崎 1979c）、後者では、八幡山大池古墳（梅本 1982）、大槨第1号古墳（藤岡 1993）、大槨第3号古墳（道上 1985）が築造されている。スクモ塚第2号・第3号古墳は直径10m程度の円墳で、箱式石棺を内部主体とする。第3号古墳には獣形鏡1、管玉2、鉄刀子などが副葬されていた。八幡山大池古墳は東西17m、南北13mの方形墳で、箱式石棺3を内部主体とする。第1主体に鉄器2が副葬されていた。大槨第1号古墳は直径約16mの円墳で、箱式石棺を内部主体とする。副葬品は出土していないが、墳丘から鉄刀子、土師器甕が出土しており、墳丘には円筒埴輪、朝顔形埴輪が立てられていた。中期中葉に位置づけられる。大槨第3号古墳は方形墳であった可能性が指摘されているが、後世の削平が著しく、規模は不明である。内部主体は箱式石棺2であり、第1号主体には、鉄剣1、鉄鏃3、鉄刀子1、鉄鎌1、鉄鋤先1が副葬されていた。中期後半に位置づけられる。また、三ッ城第2号古墳は直径約20mの円墳で、内容は明らかではないが、第1号古墳に先行して築造されており、中期前葉に位置づけられる可能性が高い。このほかにも、副葬品は不明であるが、西条盆地の各地には夫婦茶屋古墳（松崎 1979b）をはじめとして箱式石棺を内部主体とする小規模古墳が確認でき、中期に属するものが含まれると推定される。

西条盆地における中期古墳の分布は、小地域ごとで古墳を築造することのできる政治的勢力の成長があったことを示しており、開発に伴う生産力の向上を背景としているものと思われる。一方では、スクモ塚第3号古墳、大槨第1号・3号古墳は、規模や副葬品からみて、単なる小地域を代表する首長墓を越える内容を示している。こうした古墳の存在は、スクモ塚第1号古墳、三ッ城第1号古墳に象徴されるように、西条盆地における政治集団の安芸国における政治的地位の上昇を反映しているとみることができよう。

### 3. 測量の成果

丸山神社第1号古墳は前方後円墳で、丘陵の中央部に構築されており、第2号古墳は第1号古墳前方部の西側に近接して構築され、測量の時には確認できなかった第3号古墳は第1号古墳後円部の東側に隣接して構築されている（第30図）。第1号古墳

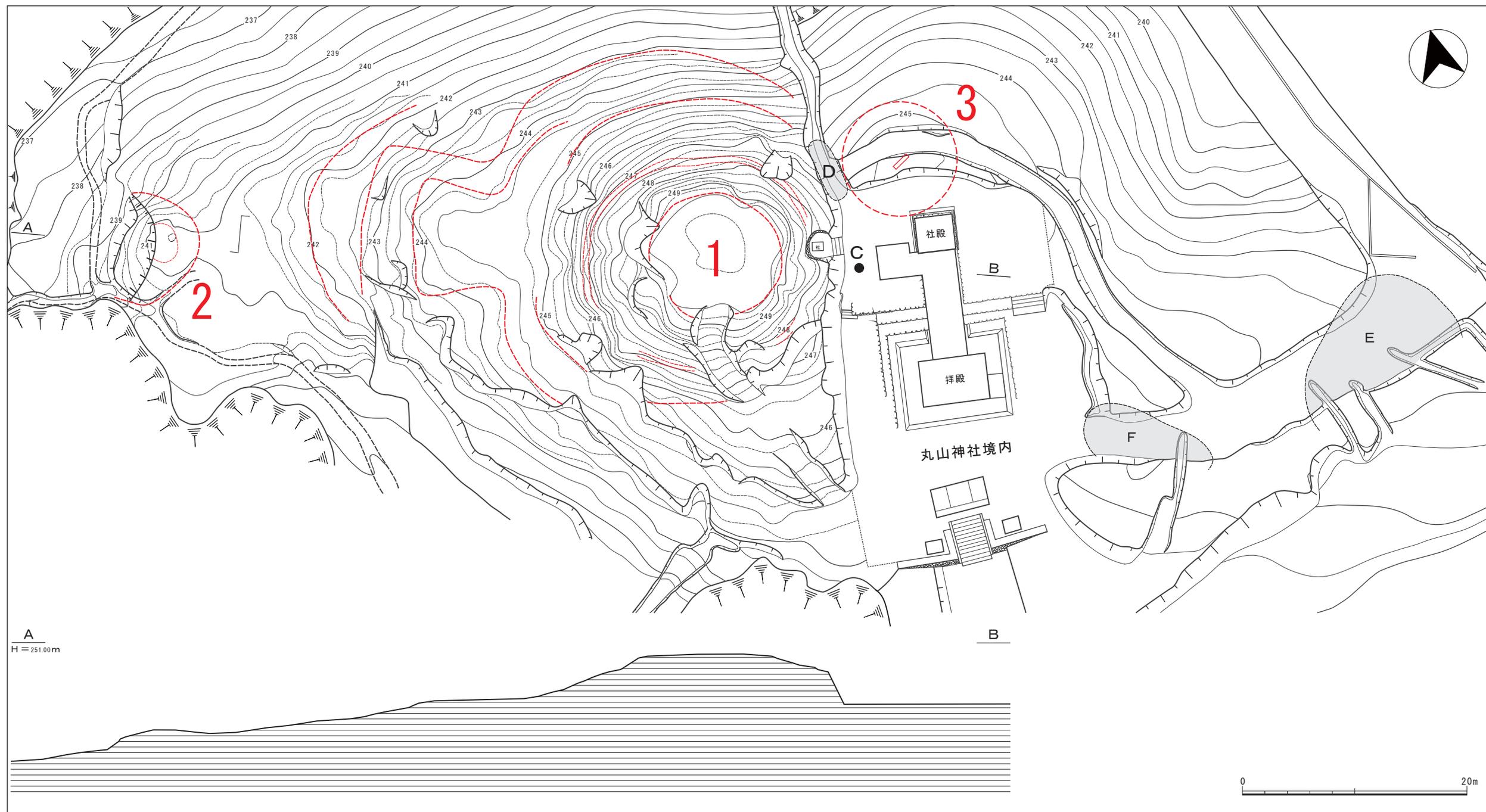
を主体に3基の古墳が丘陵主軸に沿って東西に配置される形を取っている。詳細にみると、第2号古墳は丘陵のほぼ中央部に位置し、第1号古墳の主軸の延長線付近に位置する。しかし、第3号古墳は第1号古墳後円部の北西に位置し、丘陵平坦部の北端に構築されている。第1号古墳の東側は丸山神社境内の造成によって旧地形が大きく改変されており、第1号古墳後円部東裾部や第3号古墳南部が削平されている。第3号古墳が丘陵の北側に偏った配置をしていることからすれば、丸山神社境内に第3号古墳と同規模の円墳が1～2基存在した可能性もある。

測量は標高を元に高さ50cm単位を基本として実施し、第1号古墳、第2号古墳の墳丘部および周辺については高さ25cm単位で測量した。また、古墳が築造された丘陵を含めて調査することを目的としたため、隣接の丸山神社境内周辺も含めて測量した。なお、第3号古墳は測量時点で古墳と認識できなかったため、高さ50cm単位での測量しか行っていない。

#### 1) 丸山神社第1号古墳

古墳群の盟主墳と考えられ、丸山神社東側の谷頭付近から西側の丘陵先端の間に形成されている丘陵平坦面のほぼ中央部に位置しているが、丘陵平坦面は少し南側に張り出しており、古墳の南側に平坦部が存在した可能性があることから、やや北よりに築造された可能性がある。丘陵の主軸と古墳の主軸はほぼ一致しており、前方部を丘陵先端側に向ける配置をとっている。後円部東裾付近は神社境内造成の際に削平されていることから墳裾を現状の地形からは確定できないが、ほぼ墳丘の全体が比較的よく残されている。しかし、下刈りと樹木伐採に伴って剪定された大小の樹木を小型重機を利用して搬出したようで、神社山門の西側から後円部墳頂に向かって重機によって通路が造られ、後円部墳丘の一部（後円部南側中央部）が削平されていた。また、第1号古墳南側は植林に関係すると思われる平坦面が形成されており、墳丘裾の形状がきわめて不鮮明となっている。

等高線を観察すると、後円部墳頂部はほぼ平坦である。中央部がわずかに高まりを形成している。高まりの原因は不明である。249.50mと249.25mの等高線の間付近が見かけの墳頂平坦面端で、直径11.8mである。後円部は大小の削平を受けていることから、平坦面端の形状は、所々が窪んだ、いびつな円形を呈している。前方部平坦面付近の後円部裾は明瞭で、比較的きれいな弧を描いており、245.00mの等高線前後に見かけの裾を確認することができる。245.00mの等高線は墳丘北側でもほぼ円弧を描いているが、後円部北東側では上下の等高線を含めて東西方向に直線的となって



第30図 丸山神社古墳群測量図

(赤色破線は古墳の見かけの平坦面や墳丘裾などを示している。C (●印)・D (網目部分) は壺形埴輪採集地点、E・F (網目部分) は遺物 (弥生土器ほか) 採集地点である。)

いる。後円部南側はかなり削平を受けているが、南西部では 245.00 ～ 246.00 m の間に見かけ上の裾を認めることができる。後円部南側および南東側はかなり地形改変を受けており、重機によって造られた道に沿って南南東に延びる平坦部が元の地形をどの程度反映しているのか現状では判断できない。前方部平坦面と後円部墳頂の間の後円部墳丘では、247.00 ～ 248.00 m の等高線付近で幅 50 ～ 70cm 程度の平坦面を認めることができた。墳丘の北半部を中心としており、段築の可能性がある。

前方部平坦面は東北東方向に広がっているが、西半部はかなり削平を受けている。南西あるいは北東方向に傾斜しており、平坦面端は直線をなしていない。244.00 m の等高線の前後が見かけ上の平坦面の端で、東西約 11.2 m、南北 10.0 m の規模である。前方部端に向かってわずかに開く形と思われるが、明確ではない。第 1 号古墳の墳丘裾は前方部西側および北側がもっとも明瞭である。前方部端部は 242.50 ～ 242.75 m の等高線付近で緩やかとなり見かけ上の裾を確認することができる。242.50 m と 242.00 m の等高線の間は最大で約 5 m 幅の平坦面が形成されており、第 1 号古墳の基底面と考えられる。第 1 号古墳の基底面は丘陵平坦面の傾斜に沿って緩やかに傾斜しているものと推定されるが、明確に基底面が確認できるのは前方部の西側のみで、北側の墳丘裾では明確な平坦面（基底面）を認めることはできない。上述したように、古墳の南側はかなりの地形改変を受けており、墳丘裾を含めて不明瞭である。第 1 号古墳の東側では古墳基底面が明瞭に存在した可能性があるが、神社境内の造成によって確認することはできない。このように、第 1 号古墳の墳丘裾については、前方部端部を除いては明瞭ではないが、墳丘北側の見かけの裾は現地で確認することができた。前方部北西隅は 242.75 ～ 244.25 m の等高線が明確に南から東へ屈曲しており、242.75 m の等高線付近に見かけの前方部裾を確認できる。前方部北西隅からくびれ部にかけては墳丘が崩れて埋没しているようで、243.00 m の等高線付近に見かけの裾が確認できるが、くびれの形状は不明瞭である。後円部北側は 243.25 ～ 244.00 m の等高線付近まで弧を描いており、それ以下では後円部北東部で直線的になるとともに傾斜が若干緩やかになることから、この付近を見かけ上の裾と考えている。また、後円部の北東部では弧状の等高線が屈曲して東側の丘陵斜面へと移行しており、屈曲点付近が墳丘裾と考えられる。

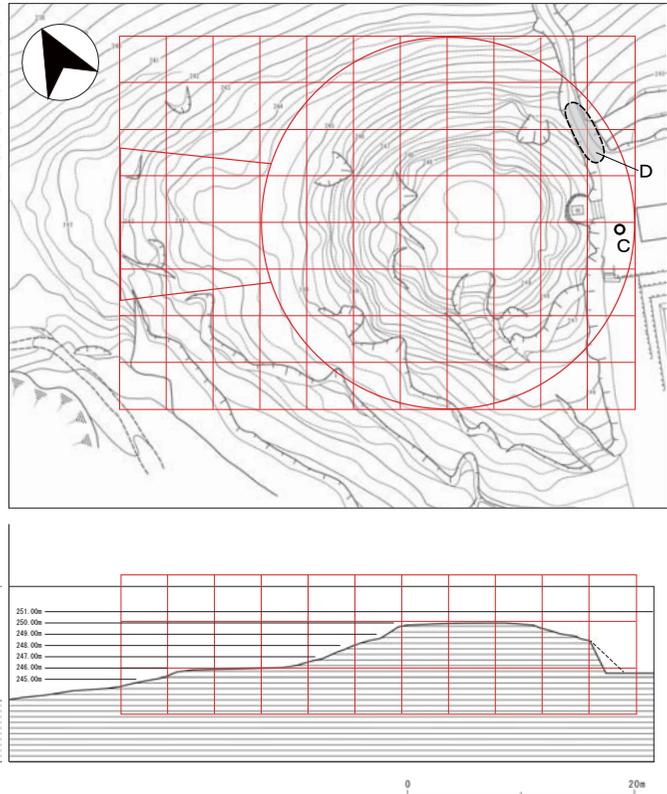
以上のことから、南側では見かけの墳丘裾が不明瞭であるが、北側の裾の状況を参考にすると、第 1 号古墳の規模は、全長約 42.9 m、後円部直径約 33.0 m、高さ 6.5 m、前方部長さ 16.0 m、幅 14.2 m、高さ約 1.8 m と考えられる。主軸は N70.8° W である。

全長は後円部東端の削平面下底から前方部裾までの長さである。後円部東端部は裾部が削平されていることから、さらに全長は長くなることは間違いない。後述する壺形埴輪が採集された地点（第30図C）を裾と仮定すると、全長44.1mに復元される。

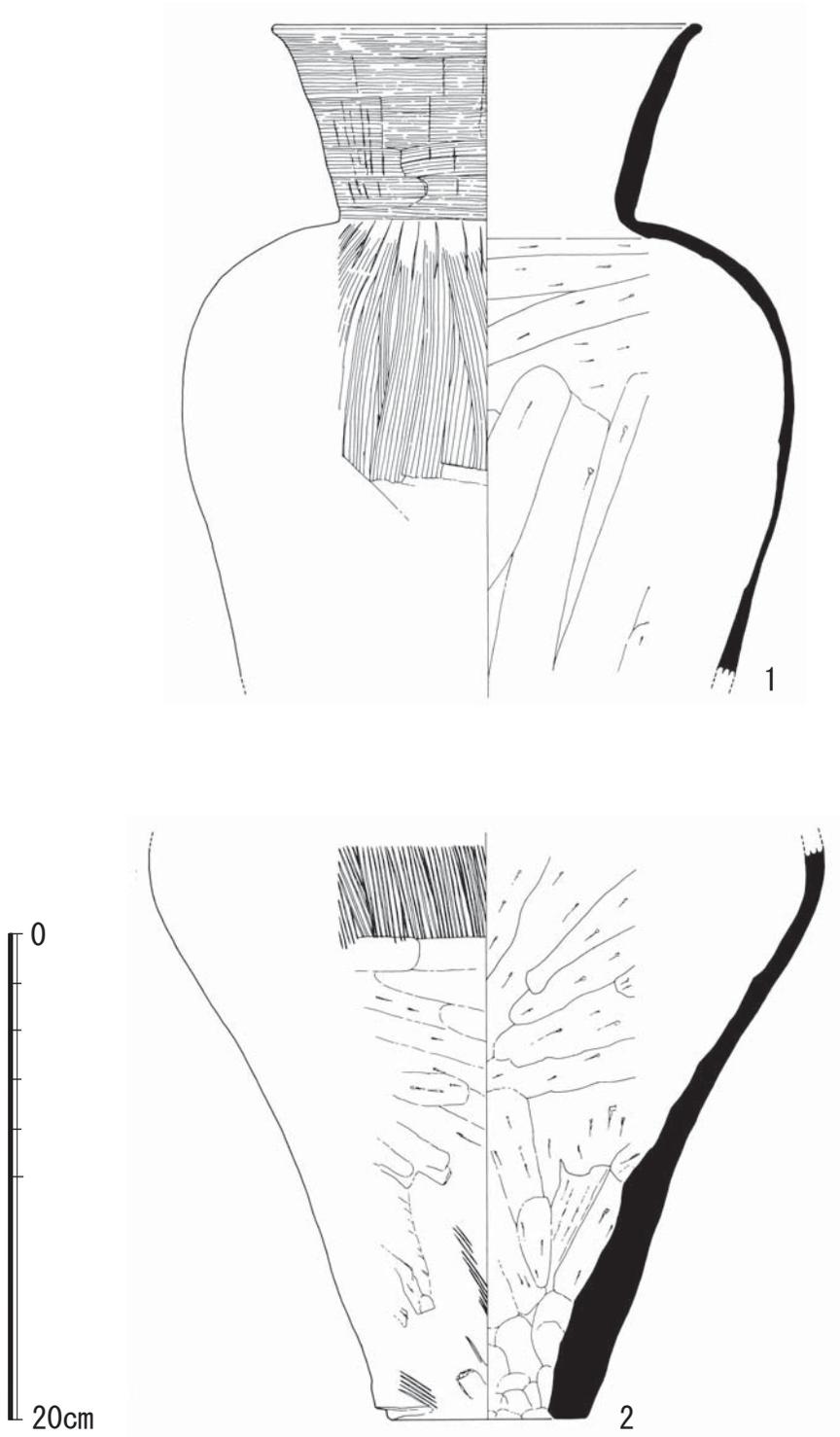
築造企画について検討してみると、後円部北側裾と墳頂部平坦面の中心を結ぶ線を後円部の半径として後円部を復元し、石部正志氏らの方法（石部・田中・宮川・堀田1979）に基づき8等分

すると、1区画は5.07m（1cm以下切り捨て）となる（第31図）。前方部の長さは3区画分となり、3区型前方後円墳（帆立貝式前方後円墳）ということができる。前方部平坦面から後円部墳頂の間での高さは約5mで、1区画分に相当する。しかし、前方部の高さは約0.3区画分で、1区画分にまったく満たない<sup>(2)</sup>。これについては今後の調査を俟って再検討したい。築造企画からみると全長は45.6mとなるが、見かけの裾および壺形埴輪採集地点から復元される44.1mよりやや大型である。第1号古墳の北東側では丘陵平坦部が北側に張り出している。第1号古墳の北側では基底面が丘陵斜面部に位置しており、設計図通りに築造しようとするれば、第1古墳北東側の丘陵平坦付近を大規模に造成する必要が生じる。こうした地形が障害となって、古墳築造にあたって後円部東裾を設計図より少し西側に納めざるを得なかったものと思われる。

次に、第1号古墳に隣接する丸山神社境内で採集された壺形埴輪について説明する

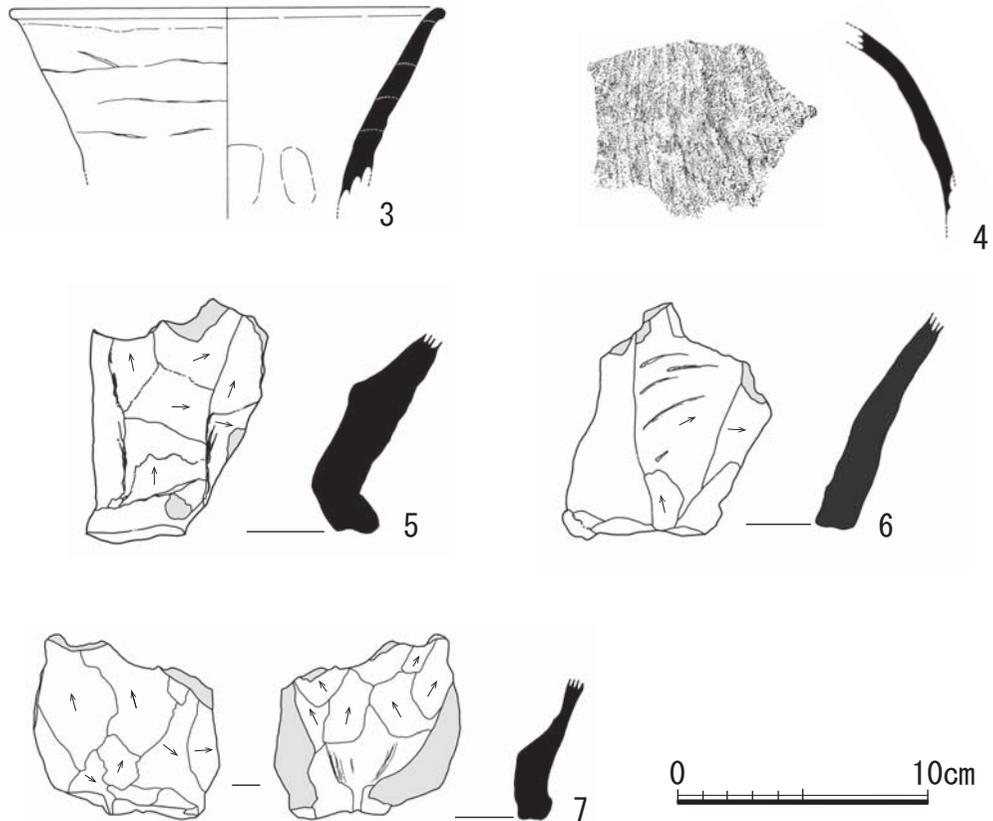


第31図 丸山神社第1号古墳の築造企画  
（C・Dは壺形埴輪採集地点）



第 32 図 丸山神社第 1 号古墳採集壺形埴輪実測図 (1)

(第 32 図 1・2、第 33 図 3～7)。1 は壺形埴輪の口縁部～胴部上半である。第 1 号古墳の東側隣接地(第 30 図 C)で採集された。後円部裾付近にあたるものと考えられる。口縁部は直立気味で外方に向かって緩やかに開いているが、口縁部端部はさらに外側に屈曲し、先細り気味に丸くおさめている。口頸部はくの字状に大きく屈曲し、肩部は丸みを帯びるが水平に近い。大きく弧を描いて胴部へ移行し、肩部から胴部上半は球形に近い。胴部中央でわずかに内彎するが、胴部下半は直線的である。口頸部外面はタテハケ調整ののち、粗いヨコナデ調整を施している。所々にわずかに先行するタテハケ調整の痕跡を認めることができる。頸部屈曲部から胴部上半は粗いタテハケ調整である。胴部下半は器面が剥落して調整はきわめて不明瞭となっているが、タテハケ調整ののちヘラ削り調整(後述するが、ヘラナデ調整という方が適当と思われる)を施していると推定される。内面は口頸部がヨコナデ調整、頸部屈曲部から以下は粗く深いヘラ削り調整である。非常に薄く仕上げており、胴部の厚さは 2～3mm 程度である。口径 17.4cm、胴部最大径 25.8cm、現存で器高 26.2cm である。2 は壺形埴輪の肩部～底部である。後円部北東裾付近で採集された(第 30 図 D)。神社境内から北側へ延びる通路の掘削の際に出土したものと思われる。胴部から底部<sup>(3)</sup>に向かって急速にすぼまり、底部は直立気味である。胴部上半を欠いているが、胴部の中央部は強い弧状を描き、胴部上半は球形に近い形態と思われる。胴部下半はわずかに内彎しながら直線的に底部に移行している。胴部下半から底部にかけて急速にすぼまる形態で、底部は円筒形に近い形態である。外面は胴部中央部がタテハケ調整、胴部下半～底部は板ナデ調整である。板ナデ調整は通常の調整と異なり、ある程度器面の粘土を掻きとっている。粘土の掻き取りを重視すればヘラ削り調整というべきであるが、器面の整形が目的のようで、ある程度粘土が乾いた状態で調整を施しており、砂粒はあまりあるいはまったく動いていない。胴部下半は横位の調整で幅 1.5cm 程度が 1 単位である。胴部中央部のタテハケ調整の後に行われている。底部は斜め方向の調整で、右下から左上方向に施している。ハケ目状の調整痕が一部に見られ、板状工具の小口を利用しているものと推定される。内面はヘラ削り調整で、胴部は斜位(見かけの工具の動きは左下から右上に)～横位(見かけの工具の動きは左から右に)の調整である。胴部の下部～底部上半は縦位のヘラ削り調整で、底部下半は指頭調整である。胴部最大径 27.4cm、底径 7.8cm、現存で器高 23.6cm である。3 は壺形埴輪の口縁部で、2 と同様、後円部北東裾付近で採集された。3 は 1 と同形態であるが、1 に比較して外方にやや開き気味である。わずかに外彎し、口縁端部は先細りで外側に屈曲し丸くおさ



第33図 丸山神社第1号古墳採集壺形埴輪実測図(2)

(5～7の矢印はヘラナデ調整の方向を示している)

めている。内外ともヨコナデ調整である。外面には粘土紐の接合部と思われるわずかな亀裂が3列認められる。4は肩部から胴部上半の破片で、第1号古墳からやや離れた丸山神社東側参道で採集された。本来は第1号古墳付近にあったものであろう。外面はタテハケ調整、内面は粗いヘラ削り調整である。タテハケ調整は幅1.4cm前後である。5～7は壺形埴輪の底部で、2と同じく、第1号古墳後円部北東側で採集された。外面ヘラナデ調整、内面指頭調整を基本とするが、7は内面も下端部を除いてヘラナデ調整が施されており、下端部はナデ調整で、絞り目が残されている。5・6の外面は工具を押さえつけるように使用しており、各調整面は平坦である。底部端は指頭による整形およびナデ調整で、わずかに窪んでいる。

## 2) 丸山神社第2号古墳

第1号古墳の約15m西に構築されており、丘陵先端に位置する円墳である。墳丘

西側を大規模に削平されており、墳丘の約半分程度を失っている。墳丘東側は尾根をカットして墳形を造り出していると考えられるが、現状は墳頂部との比高差はほとんどない。墳頂部の形状は明瞭ではないが、241.00 mの等高線の内側に見かけの平坦面端が認められ、南北約 3.5 m、東西約 2.0 mの楕円形である。見かけの墳丘裾は北側では明瞭で、241.75 ～ 239.50 mの等高線は明瞭な屈曲を見せており、現地においても見かけの墳丘裾と認識できた。南側は山道によって掘削されており、墳丘裾を確認することができなかったが、ほぼ山道のあたりが見かけの墳丘裾と判断される。これらのことから、第2号古墳は、直径約 10.0 m、高さ約 2.0 mの規模である。なお、削平された墳丘断面では箱式石棺などの主体部は確認できなかった。

### 3) 丸山神社第3号古墳

第3号古墳は第1号古墳後円部の北東側に隣接して位置している。第1号古墳の東側は墳裾を中心に大きく削平されており、第3号古墳も南部を中心に削平されていることから現状では明確にできないが、第1号古墳と墳丘裾が接していた可能性もある。

測量調査時には古墳として認識していなかったために、50cm単位の測量しか行っていない。自然地形と考えて測量していることから、測量図からは墳丘形状を十分に明らかにできない。第3号古墳については1991年9月に第3号古墳上の檜が倒木し、箱式石棺を内部主体とする円墳であることが確認され、直径約 10.0 m、高さ約 1.0 mの規模であると報告されている(石井1993)。第3号古墳の南部は削平され、墳丘北部にも通路が設置されて、墳丘の一部が削平されている。したがって、地表から墳丘の形状や墳丘規模を確認するのはやや困難な状態である。しかし、245.00 mの等高線はほぼ丸く回っており、244.50 mの等高線は一旦わずかに窪んで東側に延びており(第30図中の245の数字の北側付近)、第3号古墳の墳丘の形状を反映していると考えられる。244.00 m以下の等高線は244.50 m、245.00 mの等高線が弧を描く付近では直線的に南西-北東方向に伸びており、古墳の墳丘には関係ない等高線であろう。244.50 m、245.00 mの等高線の形状から見て244.50 m付近に見かけの裾があると想定される。確認された内部主体は丸山神社社殿の北側の崖面近くに位置しており、内部主体の中心から244.5 mの等高線までの間でもっとも近い点を3号古墳の半径と想定すると、直径約 10.2 m、高さ約 1.0 mの規模となる。

## 4. 丸山神社古墳群の編年的位置づけ

丸山神社古墳群は発掘調査は実施されていないが、幸い墳丘裾と想定される箇所か

ら壺形埴輪が採集されており、おおよその時期を考察することができる。壺形埴輪の個体数は明らかではないが、大きく2ヶ所に分かれて採集されており、2～3個体程度と思われる。全体的な特徴はほぼ共通しており、単口縁で、口縁部～胴部上半は長頸壺と共通する形態である。胴部下半は直線的で、底部に向かって急速にすぼまる。底部は外開きであるが、筒状を呈する。器高は35cm程度に復元される。調整の面では基本的に口頸部が内外ともヨコナデ調整、胴部は外面がタテハケ調整、内面がヘラ削り調整、胴部下半～底部は外面がヘラナデ調整および内面がヘラ削り調整、底部は外面がヘラナデ調整、内面指頭調整、ヘラ削り調整である。詳細にみると、南側採集品（第30図C）、北側採集品（第30図D）では形態的特徴がやや異なっている。前者は口頸部が直立気味で、直口壺にちかく、肩部の張りが強い。胴部の下部以下を欠いているため明言はできないが、後者に比べると胴部中央から下部に向けての直径の減数率が小さいことから、胴部下半の傾斜をほぼ維持しながら底部端まで直線的にすぼまり底径はかなり広い可能性が高い。後者は口頸部の開きがやや大きく、肩の張りがやや弱い。胴部下半から底部へは急速にすぼまり、底部は直立気味である。調整の面では、南側採集品は口頸部外面はタテハケ調整ののち間隔が広く深いヨコナデ調整を入念に行っているが、北側採集品は通常のヨコナデ調整である。

南北2ヶ所で採集された壺形埴輪の特徴は、個体差というよりも形式差の可能性がある。福岡県老司古墳では、複合口縁、単口縁の2種類の壺形埴輪が出土している（山口・吉留・渡辺編1989）。いずれも胴部から底部にかけてすぼまる形態であるが、直線的にすぼまるものと底部が屈曲し直立しているものの2形態が認められる。両者は口頸部、胴部の形態や調整のあり方も異なっている。現状では点数が少ないが、本古墳の壺形埴輪も2種類に分類できるものとみておきたい。

丸山神社第1号古墳採集壺形埴輪の底部は明らかに焼成前穿孔であり、樹立させるための底部作りをしているものと推定される。長胴化していることからみても、壺形埴輪としてはかなり新しい段階に位置づけられるものと考えられる。

広島県内における壺形埴輪の出土例は福山市尾上古墳のみで、隣接の山口県4例、岡山県9例<sup>(4)</sup>、島根県2例を含めても20例に満たない（中国四国前方後円墳研究会2010）。これらの壺形埴輪は複合口縁を主体としており、単口縁の形態は非常に少ない。前方後円墳集成1～5期（近藤編1991）のうち前方後円墳集成2期（以下、前方後円墳集成を省略）における出土が不明であるが、継続的に壺形埴輪を利用した埴輪祭祀が行われているようである。体部の伸長化が始まるのは3期以降のようであり、体

部の伸長が著しく底部が筒状の形態を呈するのは4期以降と考えられる。出土例および出土量が少ないため、壺形埴輪の編年は十分に検討されていないが、後述の九州地方、四国地方における変化と基本的には同様とみてよい。

九州地方や四国地方では壺形埴輪の出土例が多く、編年作業が行われている。九州地方では、埴輪の編年を行う中で、壺形埴輪が取り上げられるとともに、壺形埴輪を対象とした編年研究が散見される。村上久和は複合口縁形態の壺形埴輪について寺沢薫が茶臼山式壺の時間的変遷の検討に利用した口縁や胴部の形態、調整に関する5要素を借用して九州地方の壺形埴輪について検討し、Ⅰ～Ⅲの3期に区分（Ⅱ期は3小期に細分）した（村上1988）。Ⅱb期から胴部伸長化の兆しがみられ、Ⅱc期には顕在化する。Ⅱc期は福岡県老司古墳、佐賀県金立銚子塚古墳をあてており、老司古墳では複合口縁、単口縁の壺形埴輪が後円部二段目平坦面を取り巻いて立てられていたことが確認されている（山口・吉留・渡辺編1989）。竹中克繁は複合口縁の形態の壺形埴輪について、法量、胴部形状底部孔成形、複合口縁の形状、製作法などの要素を検討して、九州地方の壺形埴輪を4期に区分した（竹中2004）。2期以降大型化が始まり、3期以降には胴部の伸長化が進行し底部の積み上げ成形が行われるようになることを指摘している。四国地方では香川県で壺形埴輪を出土する古墳が多く調査されている。蔵本晋司は弥生時代後期～古墳時代前期の土器共献儀礼と埴輪の導入状況を検討する中で壺形埴輪の変遷を提示している（蔵本2004）。古墳時代前期を7時期に区分して単口縁（讃岐系）と複合（二重）口縁（阿波系）の壺形埴輪の編年を行っている。前4・5期の資料が口頸部のみの提示であり、詳細な記述がないため、形態や製作技術の変遷を十分に跡づけられないが、前6期以降胴部伸長化の傾向を看取できる。その後、松本和彦は四国北東部の埴輪の様相を検討する中で、倉本の編年観を基本的に踏襲しながら讃岐地方における壺形埴輪の編年を提示している（松本2010）。松本は古墳時代前期の埴輪の様相を5期（4期は2小期に細分）に区分し、壺形埴輪をA～Cの3種類に分類した。壺形埴輪A・B（Aは3期以降は製作されない）は単口縁の広口壺で、1～3期は口頸部の屈曲部分の不明瞭化、口縁部の伸長、体部の球形化などが進行し、4期後半以降は体部の長胴・筒形化が著しくなることを指摘し、壺形埴輪Cにおいても基本的な形態変化は同様な方向で変化するとみている。また、4期前半の権八原C号出土の壺形埴輪B・Cに体部が倒卵形で、底部穿孔径が広がっていることが注意されており、4期前半には体部の長胴・筒形化が始まっているとみることができる。

以上、中・四国地方、九州地方の壺形埴輪について概観した。編年の細かな部分での対比は困難であるが、前方後円墳集成の編年（近藤編 1991、以下同様）でいえば、3期以降体部の伸長傾向が認められるようになり、4期に体部の顕著な伸長化と底部の筒形化が進行したとみることができる。壺形埴輪は5期（古墳時代中期）にも認められるが、粗雑化の傾向が強く、出土例が大きく減少し、6期以降は基本的に認められなくなる。また、壺形埴輪の配置については、墳丘裾や段築平坦面を取り巻くように多量に樹立される例は広島県および隣接周辺地域では広島県尾上古墳（福山市教育委員会 2000）など3期から認められる。丸山神社第1号古墳採集の壺形埴輪は体部が細長く底部は筒状を呈しており、4期以降に位置づけられる。また、配置状況については採集点数が少なく詳細は不明であるが、採集の状況からすると墳丘裾を取り巻くように樹立されていた可能性が高く、相当量の壺形埴輪が存在するものと想定され、編年的な位置は壺形埴輪の形態と調和的である。

壺形埴輪の形態は中・四国地方、九州地方において共通した変化を窺うことができるが、口頸部の形状、胴部や底部の形態などを詳細にみると、地域ごとにより異なっている。壺形埴輪を用いた古墳祭祀は円筒埴輪導入以前の地域的な土器供献儀礼に起源をもつ（蔵本 2004）と想定されることから、各地域における土師器壺（広口壺、直口壺）を祖形に製作されているものと考えられる。丸山神社第1号古墳出土の壺形埴輪は口縁部～胴部上半は土師器壺の形態をよく残しており、口頸部の外側への開きが小さくやや直立気味で、直線的に延びること、口縁部は先細り気味で口縁端部が外側に屈曲して丸くおさめること、胴部上半は球形に近いことなどの特徴が指摘できる。西条盆地およびその周辺における土師器編年は十分に進展していないが、共通した特徴をもつ資料として、東広島市蛇迫第1号古墳出土直口壺（恵谷編 2005）、広島市岡谷遺跡2号竪穴住居跡内の直口壺を使用した壺棺墓（阿部編 1985）などを挙げるることができる。蛇迫第1号古墳は内部主体の構築法などから4世紀末の年代が与えられており、4期に位置づけられる。また、岡谷遺跡の直口壺は古墳時代前期Ⅲ期（植田 1987）に位置づけられている。古墳時代前期Ⅲ期は「布留Ⅰ式」から「布留Ⅱ式」にかかる時期とされていることから、4世紀末～5世紀初頭頃と思われ、4期末～5期初頭に位置づけられよう。これらの類似する土師器の年代観に加えて、丸山神社第1号古墳採集の壺形埴輪は焼成が良好で、胴部はきわめて薄く作られており、調整もおおむね入念であることから、4期～5期初頭に位置づけられる。

広島県西部における前方後円墳のうち時期が判明している古墳はきわめて数が少な

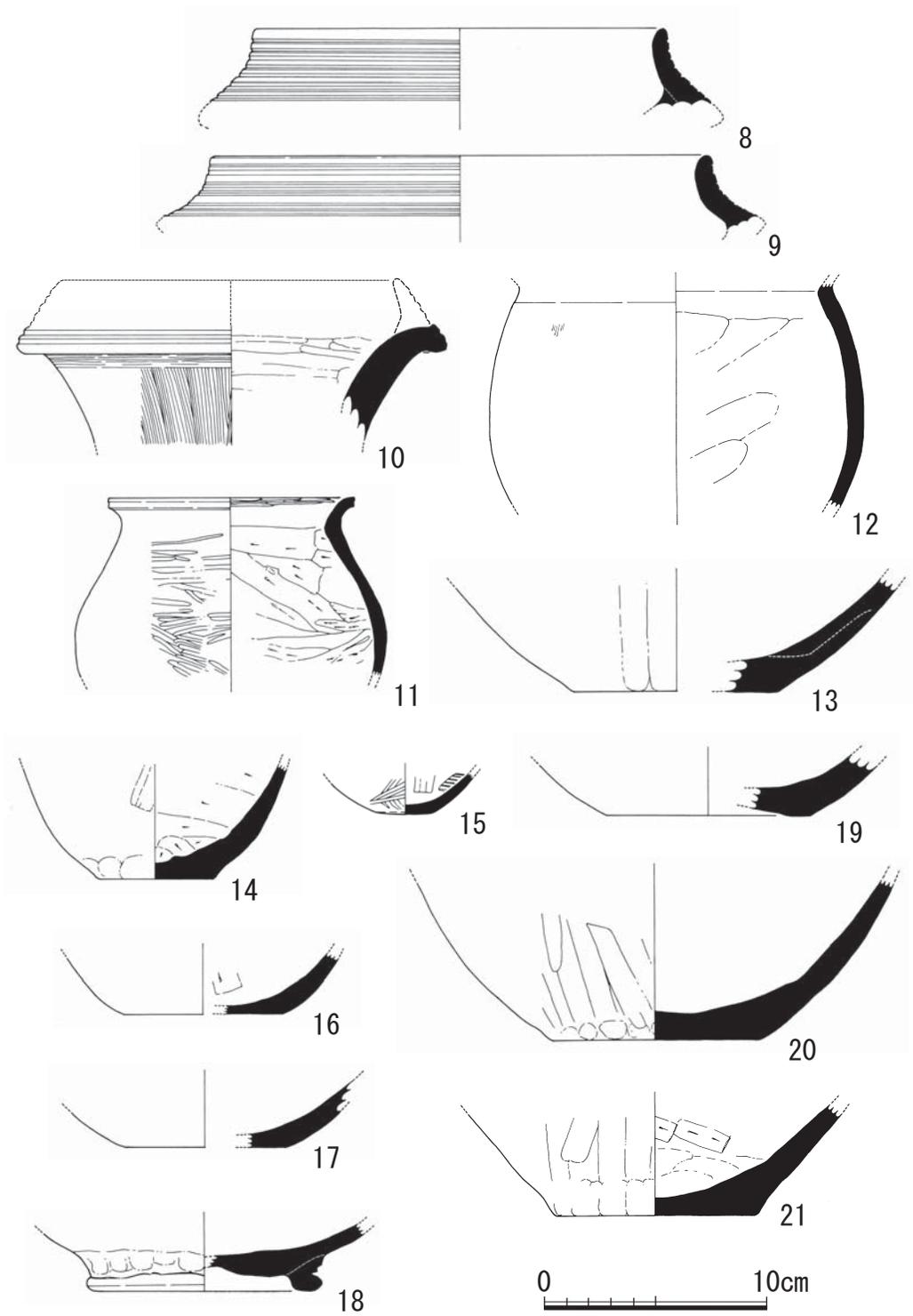
く、墳形からの時期考察は困難な状況である。西条盆地では時期が明らかな前方後円墳はスクモ塚第1号古墳（近藤編 1991）、三ッ城第1号古墳（松崎・木下・豊・池田 1954、石井編 2004）の2基である。スクモ塚第1号古墳は4区型前方後円墳で、5期に位置づけられる<sup>(5)</sup>。丸山神社第1号古墳に近い築造企画であるが、公表図面がなく対比できない。三ッ城第1号古墳は6期で、6区型前方部後円墳である。

太田川下流域では広島市東区高陽町小田の太田川を見下ろす丘陵上に中小田第1号古墳（潮見編 1980）、中小田第4号古墳（高下編著 2004）、山武士塚第1号古墳（石井・角田 1995）が比較的近接して築造されている。時期が明らかなのは中小田第1号古墳のみで、2期に位置づけられる。他の2基は時期不明であるが、中小田第1号古墳に後続する時期に位置づけられるものであろう。山武士塚第1号古墳は全長32.5mで、竪穴式石室を内部主体とする。3区型の前方後円墳で、規模が若干異なるものの、丸山神社第1号古墳とよく似た墳丘形態である。山武士塚第2号古墳は同第1号古墳に近接して築造された竪穴式石室を内部主体とする古墳（墳形不明）で、珠文鏡、鉄鏃などが出土している。6期を前後する時期に位置づけられ、第1号古墳に後続して築造されたものと想定される。中小田第1号古墳、同第4号古墳、山武士塚第1号古墳は異なる時期に築造されたと考えられ、山武士塚第1号古墳は3～5期のいずれかの時期に築造されたものであろう。

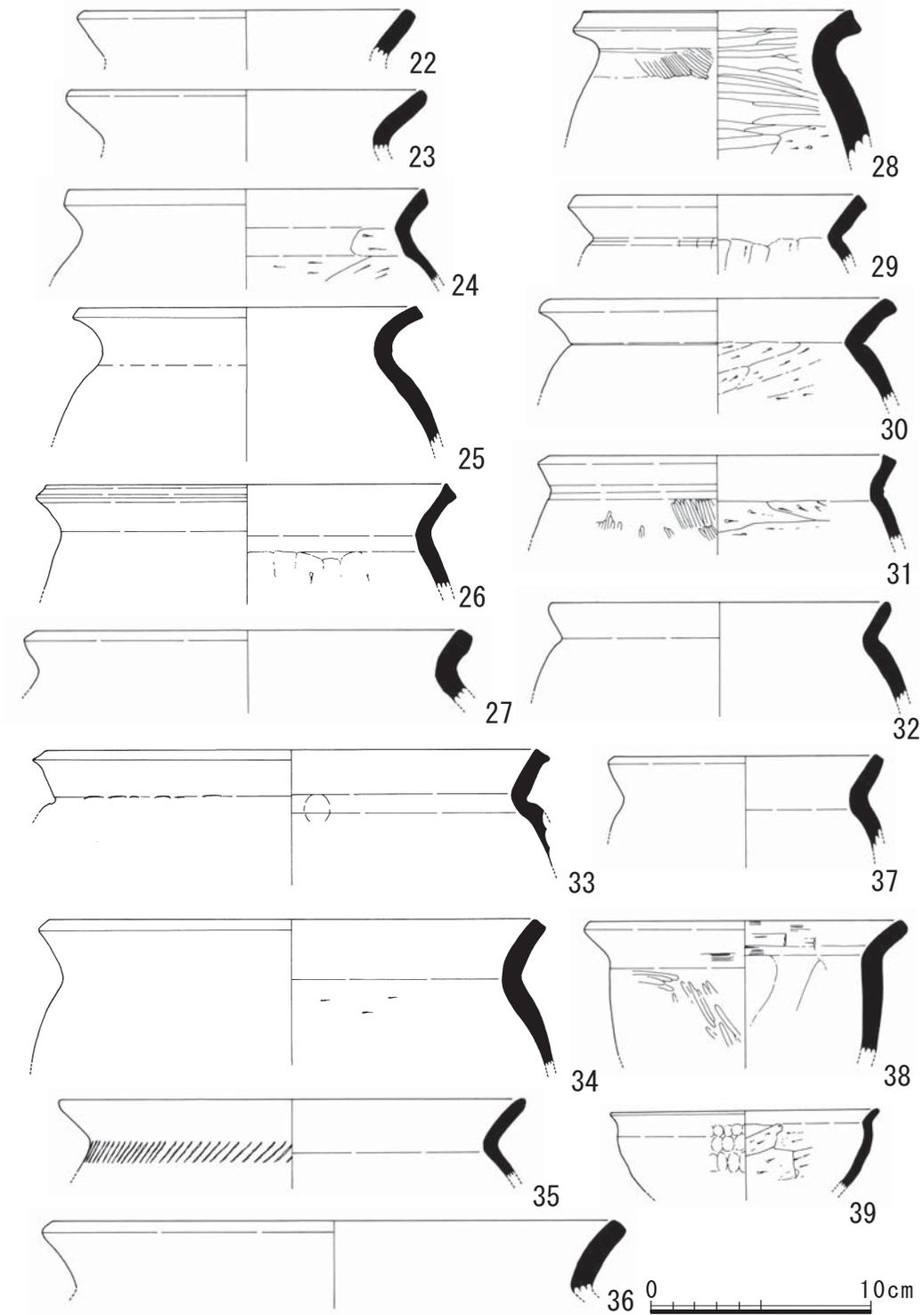
丸山神社第1号古墳は未調査であることから詳細な時期を考察することはできないが、採集の壺形埴輪などを手がかりにすれば、4期～5期初頭の時期に位置づけることが可能である。同第2号古墳、同第3号古墳についても詳細な時期は不明である。第2号古墳は丘陵平坦面の端に占地することから第1号古墳に後続するとみておきたい。第3号古墳は第1号古墳後円部の北東に隣接して築造されているが、両古墳裾部分が削平されており、地表観察では前後関係を検討できなかった。しかし、第1号古墳後円部東側は第3号古墳が位置する丘陵地形に規制される形で墳丘を構築していること、第3号古墳が第1号古墳によって古墳群の西側に広がる低地部から視認が困難な位置にあることなどから、第3号古墳が第1号古墳に先行して築造されていた可能性もある。

## 5. 丸山神社周辺の採集遺物

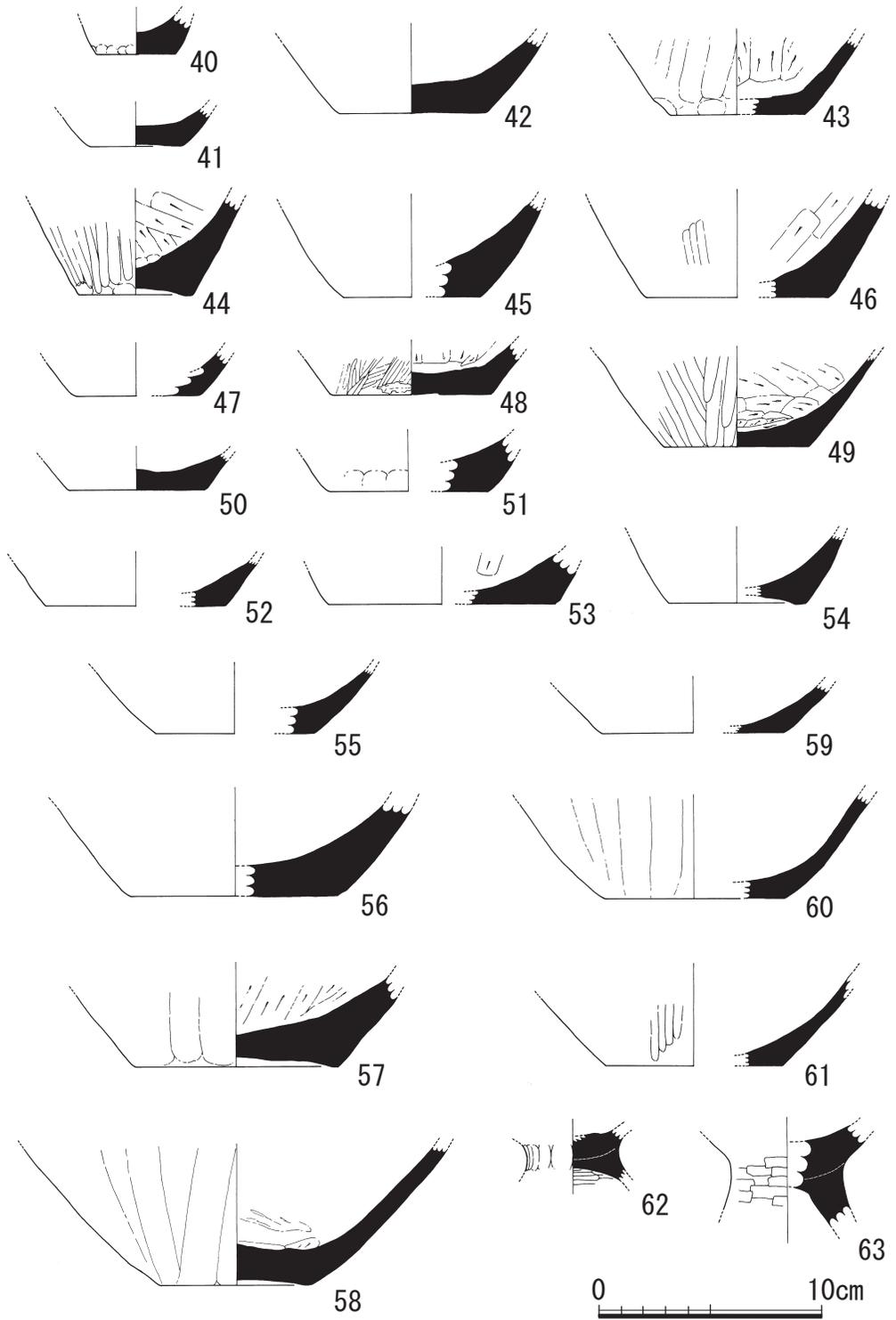
丸山神社周辺では、神社境内の東側参道を中心に、弥生土器などが採集されている。採集遺物の大半は弥生土器であり、そのほかに須恵器、土師器、安山岩剥片などが少



第 34 图 丸山神社周辺採集土器実測図 (1)



第35图 丸山神社周辺採集土器実測図(2)



第 36 图 丸山神社周边采集土器实测图 (3)

第2表 丸山神社周辺採集土器観察表

No.	種類	器種	部位	採取場所	口径 (復元)	底径	残存高	焼成	器面調整
									外 面
1	弥生土器	壺形土器	口縁部	分布E	—	—	3.6	不良	器面が摩滅しており、不明。
2	弥生土器	壺形土器	口縁部	分布E	(22.0)	—	3.2	やや甘い	器面が摩滅しており、調整不明。
3	弥生土器	壺形土器	口頸部	東側進入路	—	—	5.2	良好	頸部は縦方向のハケ目調整、口縁部はヨコナデ調整。ハケ目の単位は約1.5cm、9条程度？。
4	弥生土器	壺形土器	口縁部 ～胴部	東参道	11.0	—	8.1	良好 胎土堅緻 黒斑あり	口頸部はヨコナデ調整、胴部上半は横方向のヘラ磨き調整、胴部中央部は斜め方向（右下がり）のヘラ磨き調整である。磨き調整の単位は幅1mm程度である。
5	弥生土器	甕形土器	胴部～ 底部	分布E	—	—	9.6	やや甘い	ヨコナデ調整及びナデ調整である。
6	弥生土器	壺形土器	底部	分布E	—	(10.0)	5.0	良好	ヘラナデ調整である。
7	弥生土器	壺形土器	胴部～ 底部	分布E	—	5.6	5.0	良好	体部はヘラナデ調整で、底部下端に指頭痕が痕跡的に認められる。底面は粘土掻き取りの後、ナデ調整を施している。
8	弥生土器	壺形土器	底部	分布E	—	2.6	1.9	良好	ヘラ磨き調整である。底面は器面が剥落し、調整は不明。
9	弥生土器	壺形土器	底部	分布E	—	—	2.7	やや焼きが 甘い	器面はかなり剥落しているが、ヘラナデ調整と思われる。
10	弥生土器	壺形土器	底部	分布E	—	—	3.0	やや焼きが 甘い	器面が剥落し、調整不明。
11	弥生土器	壺形土器	底部	分布E	—	9.6	3.0	やや焼きが 甘い	底部は粘土帯を貼り付け、指頭痕調整、ナデ調整により仕上げている。底面は粘土を粗く掻き取っている。
12	弥生土器	壺形土器	底部	北参道	—	8.8	3.1	良好	器面がやや摩滅しており、不明瞭である。
13	弥生土器	壺形土器	胴部～ 底部	分布E	—	9.5	7.0	良好	底部下端に指頭調整を施し、底部～胴部には丁寧なヘラナデ調整を行っている。
14	弥生土器	壺形土器	底部	東参道	—	(10.0)	5.0	良好	底部下端に指頭調整を施し、底部～胴部には粗いヘラ磨き調整を行っている。
15	弥生土器	甕形土器	口縁部	分布E	(16.0)	—	2.0	良好	ヨコナデ調整である。
16	弥生土器	甕形土器	口縁部	分布E	17.0	—	2.5	良好	器面がやや摩滅しているが、ヨコナデ調整と思われる。
17	弥生土器	甕形土器	口頸部	分布E	—	—	4.0	良好	ヨコナデ調整である。
18	弥生土器	甕形土器	口縁部 ～胴部	分布E	16.2	—	6.4	良好	口縁部はヨコナデ調整、頸部～胴部はハケ目調整の後、ヨコナデ調整である。
19	弥生土器	甕形土器	口縁部 ～肩部	東参道	16.4	—	4.8	良好、胎土 堅緻	ヨコナデ調整である。
20	弥生土器	甕形土器	口頸部	分布E	(16.0)	—	3.2	良好、胎土 堅緻	頸部以下はハケ目調整を行っており、口縁部を含む全体をヨコナデ調整で仕上げている。
21	弥生土器	甕形土器	口縁部 ～胴部	分布E	(12.0)	—	6.8	良好、堅緻	口縁端部は強いヨコナデ調整で窪む。頸部～肩部はヘラナデ調整、口縁部および胴部はヨコナデ調整である。
22	弥生土器	甕形土器	口頸部	分布E	(12.6)	—	3.0	良好	口縁部～肩部に粗いナデ調整の後に回転ナデ調整を行う。口縁端部は強いナデ調整でわずかに窪む。頸部は指押え調整痕が残されている。
23	弥生土器	甕形土器	口縁部 ～肩部	分布E	—	—	4.8	やや甘い	口唇部の器面が摩滅・剥落しているが、ヨコナデ調整と思われる。頸部の接合部はヘラ状工具で押さええている。
24	弥生土器	甕形土器	口縁部 ～肩部	東参道	—	—	3.9	良好、胎土 堅緻	口頸部はヨコナデ調整、肩部～胴部は縦方向のヘラ磨き調整である。

器面調整	色調		胎 土	挿図番号	備考
	外面	内面			
内 面	外面	内面			
器面は摩滅、剥落しており、不明。	淡黄褐色	淡黄褐色	1mm 程度の砂粒を含む。	第 34 図 8	沈線文は断面三角形。
器面が摩滅しており、調整不明。	淡橙褐色	淡黄褐色	1 ～ 2mm の砂粒を含む。	第 34 図 9	
口頸部はやや粗いヘラ磨き調整である。	赤褐色	赤褐色	0.5mm 以下の微砂粒を多く含む。	第 34 図 10	複合口縁の上部拡張部が外れている。
口縁部上半はヘラ磨き、口縁部下半～頸部はヨコナデ調整、頸部以下は横方向を中心とするヘラ削り調整である。	橙褐色	暗橙褐色	0.5mm 程度の砂粒を含む。	第 34 図 11	
ヘラ削り調整の後丁寧にナデ消しており、わずかに痕跡が認められる程度である。器面は平滑に仕上げられている。	淡黄褐色	淡黄褐色	1mm 前後の砂粒を含む。	第 34 図 12	
丁寧にナデ調整で仕上げられており、器面は平滑である。	淡黄褐色	淡黄褐色	1 ～ 2mm の砂粒を多く含む。0.5mm 以下の微砂粒を少量含む。	第 34 図 13	
ヘラ削り調整の後、丁寧にナデ消しを行い、平滑に仕上げられている。	赤褐色	赤褐色	0.5mm 以下の砂粒を多く含む。	第 34 図 14	
ヘラ削り調整の後、丁寧にナデ消しを行っている。	橙褐色	赤褐色	1 ～ 2mm の砂粒を含む。	第 34 図 15	
ヘラ削り調整の後、丁寧にナデ消している。	淡黄褐色	淡黄褐色	1 ～ 2mm の砂粒、0.5mm 以下の微砂粒を主体とする。	第 34 図 16	
丁寧にナデ調整で仕上げている。	黄褐色～淡黄褐色	淡黄褐色～淡黄褐色	0.5 ～ 1mm の砂粒を含む。部分的に 0.5mm 以下の微砂粒を多く含む。	第 34 図 17	
ナデ調整である。	淡黄褐色	淡黄褐色	0.5 ～ 2mm の砂粒を含み、0.5 ～ 1mm 程度の砂粒を主体とする（砂粒は少ない）。	第 34 図 18	
ヘラ削り調整の後、ナデ消している。	灰黒色	橙褐色	0.5mm 前後の砂粒を含む。	第 34 図 19	
ヘラ削り調整の後、底部下半は丁寧にナデ消して平滑にし、底部上半～胴部はヘラナデ調整を施して平滑にしている。	淡黄褐色～灰褐色	淡黄褐色	1 ～ 2mm 程度の砂粒を多く含む。	第 34 図 20	
ヘラ削り調整の後、粗いヘラ磨き調整を施し、器面を平滑にしている。	淡黄褐色	黄褐色	0.5 ～ 2mm 程度の砂粒を多く含む。	第 34 図 21	
ヨコナデ調整である。	淡黄褐色	淡黄褐色	1mm 前後の砂粒を含む。	第 35 図 22	
器面がやや摩滅、剥落しているが、ヨコナデ調整と思われる。	淡黄褐色	淡黄褐色	1mm 前後の砂粒を主体とするが、2 ～ 4mm 程度の砂粒を少量含む。	第 35 図 23	
口縁部～頸部はヨコナデ調整、肩部以下はヘラ削り調整である。	淡黄褐色	淡黄褐色	1mm 前後の砂粒を含む。	第 35 図 24	
口頸部はヨコナデ調整で、頸部以下はヘラ削り調整の後、丁寧にナデ消している。	淡 灰 褐 色 (橙味あり)	橙褐色	0.5 ～ 1mm 程度の砂粒を含む。	第 35 図 25	
口頸部はヨコナデ調整、頸部以下はヘラ削り調整である。	灰褐色	淡灰褐色	0.5 ～ 1mm 程度の砂粒を主体とするが、2mm 程度の砂粒が若干見られる。	第 35 図 26	
やや器面の剥落部分が広いが、ヨコナデ調整である。	暗橙褐色	暗赤褐色～灰褐色	0.5mm 以下の砂粒を主体とするが、1 ～ 4mm の砂粒を少量含む。	第 35 図 27	
口縁部はヨコナデ調整、頸部以下は横方向のヘラ磨き調整である。	淡黄褐色	淡橙褐色	0.5mm 程度の砂粒を主体とする。	第 35 図 28	
口縁部は回転ナデ調整、頸部以下はヘラ削り調整である。	淡黄褐色	淡黄褐色	1 mm 以下の砂粒を少量含む。	第 35 図 29	
口縁部はヨコナデ調整、頸部以下はヘラ削り調整である。	淡黄褐色	淡黄褐色	0.5 ～ 2mm の砂粒を含む。	第 35 図 30	
口頸部はヨコナデ調整、頸部以下はヘラ削り調整である。	灰褐色	灰褐色～淡黄褐色	0.5mm 程度の砂粒を主体とする。	第 35 図 31	

	種類	器種	部位	採取場所	口径 (復元)	底径	残存高	焼 成	器面調整
									外 面
25	弥生土器	甕形土器	口縁部 ～胴部	分布 E	(15.0)	—	4.4	焼きが甘い	口頸部はヨコナデ調整、肩部以下は器面剥落が著しく、調整不明。
26	弥生土器	甕形土器	口頸部	分布 E	—	—	5.3	良好 胎土堅緻	ヨコナデ調整である。
27	弥生土器	甕形土器	口縁部 ～胴部	分布 E	—	—	6.6	良好	頸部～胴部はハケ目調整の後、口縁部～胴部にヨコナデ調整を行う。
28	弥生土器	甕形土器	口頸部	分布 E	(21.0)	—	3.6	やや不良 軟質	器面は摩滅しているが、ヨコナデ調整と思われる。
29	弥生土器	甕形土器	口縁部	分布 E	—	—	3.2	良	一部器面が剥落しているが、ヨコナデ調整を主体とすると思われる。
30	弥生土器	甕形土器	口縁部 ～胴部	分布 E	—	—	4.2	良好	ヨコナデ調整である。
31	弥生土器	鉢形土器	口縁部 ～胴部	分布 E	(14.0)	—	6.0	良好	口縁部～頸部はヨコナデ調整、胴部はヘラ磨き調整である。
32	弥生土器	鉢形土器	口縁部 ～胴部	分布 E	13.0	—	3.6	良好 胎土堅緻	胴部～頸部は指頭調整で成形し、ヨコナデ調整で仕上げている。部分的にハケ目調整と思われる痕跡が残されており、器面全体をハケ目調整しているかもしれない。
33	弥生土器	器種不明	底部	分布 E	—	(3.6)	1.8	良好	底部周辺に指頭調整を施している。
34	弥生土器	器種不明	底部	-	—	4.4	1.6	良好	器面が剥落し、調整不明。
35	弥生土器	器種不明	底部	分布 E	—	6.4	3.3	良好	全体に摩滅しているが、ヘラナデ調整を施していると思われる。
36	弥生土器	器種不明	底部	分布 E	—	(6.5)	3.4	良好、胎土堅緻	体部はヘラナデ調整、底面はナデ調整である。
37	弥生土器	器種不明	底部	東参道	—	(4.8)	4.3	良好、胎土堅緻 黒斑あり	ヘラ磨き調整である。
38	弥生土器	器種不明	底部	北参道	—	4.4	4.2	良好	ヘラナデ調整である。
39	弥生土器	器種不明	底部	東参道	—	7.4	4.3	良好	粗いヘラ磨き調整で、底部はナデ調整である。
40	弥生土器	器種不明	底部	分布 E ?	—	6.0	2.0	やや甘い	器面が摩滅しており、調整不明。
41	弥生土器	器種不明	底部	東参道	—	6.4	2.2	良好 胎土堅緻	ヘラ磨き調整である。底面は丁寧なナデ調整である。
42	弥生土器	器種不明	底部	東参道	—	6.4	4.0	良好 胎土堅緻	胴部～底部はヘラ磨き調整である。底面は粘土の高まりをヘラ削り調整で平滑にした後、ナデ消している。
43	弥生土器	器種不明	底部	分布 E	—	5.6	1.8	やや甘い	器面が摩滅、剥落しており、調整不明。
44	弥生土器	器種不明	底部	分布 E	—	(8.0)	2.4	やや甘い	器面が摩滅、剥落しており、調整不明。底部下端に指頭調整痕をわずかに観察できる。
45	弥生土器	器種不明	底部	分布 E	—	—	2.0	良好	器面が剥落し、不明。
46	弥生土器	器種不明	底部	分布 E	—	(7.0)	2.3	良好	底部は器面が剥落し、調整不明。底面はナデ調整
47	弥生土器	器種不明	底部	分布 E	—	(5.0)	3.0	やや焼きが甘い	器面は摩滅し剥落しており、調整不明。
48	弥生土器	器種不明	底部	分布 E	—	3.6	2.9	良好 胎土堅緻	ヘラナデ調整である。
49	弥生土器	器種不明	底部	分布 E	—	—	4.0	良好	ハケ目調整の後、ヘラナデ調整を行っている。
50	弥生土器	器種不明	底部	第1号墳(後門部)南側	—	(9.5)	4.0	良好 胎土堅緻	ヘラナデ調整である。底面はヘラナデ調整の可能性はあるが、粗いヘラ磨き調整状となっている。

器面調整	色調		胎 土	挿図番号	備考
	外 面	内 面			
口頸部はヨコナデ調整で、頸部以下はヘラ削り調整の後、ナデ消している。	淡黄色	淡黄色	0.5mm 以下の微砂粒を含む。	第 35 図 32	
口縁部はヨコナデ調整、頸部以下はヘラ削り調整の後、ナデ消している。口縁端部は強いヨコナデ調整でわずかに窪む。	淡黄橙色	淡黄褐色	1mm 前後の砂粒を含む。	第 35 図 33	
器面はほとんど剥落しており、調整不明。	淡黄褐色	淡黄灰褐色?	0.5~1mm 程度の砂粒を含む。また、0.5mm 以下の白色微砂粒を含む。	第 35 図 34	
器面は摩滅し、一部剥落しているが、口縁部はヨコナデ調整、頸部はヘラ削り調整の後ナデ消している。	淡黄褐色	淡黄褐色	1mm 前後の砂粒を含む。	第 35 図 35	
ヨコナデ調整である。	淡黄褐色	淡黄褐色	1mm 前後の砂粒を多く含む。0.5mm 程度の長石を含む。	第 35 図 36	
口頸部はヨコナデ調整である。頸部以下は丁寧なナデ調整で、器面は平滑に仕上げられている。	淡橙色	淡橙色	0.5 ~ 1mm 程度の砂粒を主体とし、1 ~ 2mm 程度の砂粒を混じえる。	第 35 図 37	
口縁部はヨコナデ調整、頸部以下はヘラ削り調整の後、丁寧にナデ消していると思われる。	灰褐色	灰褐色	1mm 前後の砂粒を多く含む。0.5mm 程度の長石を含む。	第 35 図 38	
口縁部はヨコナデ調整、頸部以下はヘラ削り調整である。	淡黄橙色	淡黄褐色	1mm 前後の砂粒を含む。0.5mm 以下の白色微砂粒を多く含む。	第 35 図 39	
下→上方向を中心にヘラ削り調整の後、粗いナデ調整を施している。	橙褐色	橙褐色	0.5mm 前後の砂粒を多く含む。	第 36 図 40	
ヘラ削り調整である。	赤褐色	灰褐色 (やや赤味あり)	0.5 ~ 1mm 前後を主体とする砂粒を多く含む。0.5mm 前後の長石粒を多く含む。	第 36 図 41	
ヘラ削り調整で、底部は下→上へ、底面は他方向に調整している。	灰褐色、底面は黒色	灰黒色 ~ 黒色	1mm 前後の砂粒を多く含む。	第 36 図 42	
ヘラ削り調整の後、粗くナデ消している。	淡黄褐色	灰褐色	0.5 ~ 1mm 程度の砂粒を含む。	第 36 図 43	
ヘラ削り調整の後、粗くナデ消している。	橙褐色	暗褐色	0.5 ~ 1mm 程度の砂粒をわずかに含む。	第 36 図 44	
ヘラ削り調整の後に、粗くナデ消している。	淡灰褐色	淡灰褐色	0.5 ~ 2mm 程度の砂粒を多く含む。1 ~ 2mm 程度の砂粒の割合が高い。	第 36 図 45	
ヘラ削り調整である。	淡灰褐色 (赤味あり)	灰黒色	0.5 ~ 1mm 程度の砂粒を多く含む。	第 36 図 46	
ナデ調整である。	灰黄褐色	灰黄褐色	1 ~ 2mm の砂粒を含む。	第 36 図 47	
ヘラ削り調整の後、ナデ消している。	灰褐色 (やや褐色味が強い)	淡灰褐色	0.5 ~ 1mm 程度の砂粒を主体とするが、2 ~ 3mm の砂粒を少量含む。	第 36 図 48	
ヘラ削り調整である。	淡黄褐色 ~ 淡黄褐色	黄褐色	0.5 ~ 1mm の砂粒を多く含む。2 ~ 5mm の大粒の砂粒も一定量含んでいる。	第 36 図 49	内面の剥落が激しい。
器面が剥落し、調整不明	橙褐色	灰褐色	1mm 程度の砂粒を多く含む。	第 36 図 50	
ナデ調整である。	淡灰褐色	淡黄褐色	1mm 程度の砂粒を多く含む。5mm 前後の大型砂粒も少量認められる。	第 36 図 51	
ヘラ削り調整の後、丁寧にナデ消している。	淡黄褐色	灰褐色	0.5 ~ 1mm 程度を主体とするが、2 ~ 3mm 程度の大粒の砂粒を含む。	第 36 図 52	
ヘラ削り調整である。	赤褐色	黄赤褐色	0.5 ~ 1mm 程度の砂粒を多く含む。	第 36 図 53	
摩滅しているが、器面に凹凸が認められないことから、丁寧にナデ調整と思われる。	褐色 ~ 暗褐色	灰褐色	1mm 前後の砂粒を含む。	第 36 図 54	
ヘラ削り調整の後、粗くナデ消している。	橙褐色	淡黄褐色	1mm 前後の砂粒、0.5mm 以下の微砂粒を多く含む。	第 36 図 55	
下→上方向を中心にヘラ削り調整している。痕跡がやや不明瞭で、粗いナデ調整を施しているものと思われる。	暗黄褐色、一部橙褐色	橙褐色	1mm 前後の砂粒を多く含む。2・3mm の大型砂粒も若干混じる。	第 36 図 56	底面にヘラ削り痕がある。
ヘラ削り調整である。	暗褐色	暗赤褐色	1 ~ 3mm の砂粒を主体とするが、5mm 以上の大きな砂粒を少量含む。	第 36 図 57	

種類	器種	部位	採取場所	口径 (復元)	底径	残存高	焼成	器面調整
								外 面
51	弥生土器	器種不明	底部	分布E?	—	5.8	6.2 良好 胎土堅緻	体部はヘラナデ調整、底面は粘土の掻き取りの後、ナデ調整である。
52	弥生土器	器種不明	底部	分布E	—	(4.5)	2.2 良好	ヘラナデ調整である。
53	弥生土器	器種不明	底部	分布E	—	(11.0)	4.5 良好	器面がやや摩滅しているが、ヘラナデ調整を施していると思われる。
54	弥生土器	器種不明	底部	分布E	—	—	3.4 良好	やや粗いヘラ磨き調整である。底面はナデ調整である。
55	弥生土器	高坏形土器	坏・脚部 接合部	分布E	—	—	2.3 良好 胎土堅緻	指頭調整の後、ヨコナデ調整を行っている。
56	弥生土器	高坏形土器	坏・脚部 接合部	分布E	—	—	4.6 良好 胎土堅緻	坏部はヨコナデ調整、脚部は横方向のヘラ磨き調整である。

量認められる。東側参道の遺物分布状況は一定のまとまりがあり、とくに東側の分布域（第30図E）で多くの遺物が採集されている。第1号古墳の墳丘裾でも弥生土器がわずかに採集されており、丘陵部の広い範囲に弥生時代を中心とする集落跡が存在するものと推定される。

採集土器は細片が大半であるが、口縁部～胴部、胴部の大半を残すものが少量含まれている。器形が判断できるものは基本的に弥生土器で、土師器は1点確認できたのみである。須恵器は合計で8点を確認したが、資料化に耐えうるものはない。胎土から縄文土器の可能性が指摘できるものが数点あるが、文様等は不明であり、資料化が困難な小破片である。弥生土器は、口縁部については時期判定が可能であるため、できるだけ資料化した。底部についてもある程度時期判定が可能であるため、できるだけ資料化した。

弥生土器は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高坏形土器が認められる。

壺形土器（第34図8～11、13～21）複合口縁（8～10）と単口縁（11）がある。前者の口縁部外面には擬凹線文（8・9）、凹線文（10）を施している。8・9は後円部上部のみの破片で、よく似た形態である。10は口縁部の上部が外れており、口縁端部は擬口縁となっている。煙突状の複合口縁壺形土器が復元される。後者は短頸壺形土器で、口縁端部を平らにおさめているが、強いヨコナデ調整でわずかに窪んでいる。13～17・19・20は丸みのある底部および胴部下半～底部で、壺形土器と判断される。21は直線的な側面形であるが、底部から胴部下半にかけて大きく開いており、壺形土器であろう。いずれも平底であるが、15は丸底化の傾向が認められる。19はわずかに上げ底となるものと思われる。18は丸底にあまり端正ではない脚部が付くもので、脚付壺形土器の可能性がある。調整は、外面がヘラナデ調整、ナデ調整で仕上げ、内面はヘラ削り調整ののちナデ消しているものが多いが、14は内面にヘラ削り調整

器面調整	色調		胎 土	挿図番号	備考
	外面	内面			
ヘラ削り調整の後、丁寧なナデ消しを行っており、器面は平滑に仕上げられている。	黄褐色～暗灰色	黄褐色	0.5～2mmの砂粒を多く含む。1～2mmの砂粒の割合が比較的高い。	第36図58	
ヘラ削り調整の後、丁寧にナデ消している。	淡黄褐色	淡黄褐色	0.5mm程度の砂粒を主体に、1～2mmの大粒の砂粒を若干含む。	第36図59	
丁寧なナデ調整で仕上げている。	淡黄褐色	橙褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む。長石粒を多く含む。	第36図60	
丁寧なナデ調整で仕上げている。平滑である。	淡黄褐色	淡黄褐色	0.5mm以下の砂粒を含む。	第36図61	
坏部は丁寧なナデ調整、脚部はヘラ磨き調整である。	淡黄褐色	坏部・脚部とも淡黄褐色	0.5mm程度の微砂粒を含む。	第36図62	
坏部は粗いヘラ磨き調整、脚部はヘラナデ調整である。	淡黄褐色	黄灰色	0.5～4mmの砂粒を含み、3mm前後の砂粒が一定量認められる。	第36図63	

が明瞭に残されている。また、15は外面が丁寧なヘラ磨き調整である。

甕形土器（第34図12、第35図22～37）口頸部がくの字状に屈曲するものが基本であるが、屈曲部が丸みをもつもの（24・25・28・31・37）が一定量認められる。口縁端部は、内外にわずかに拡張するもの（26・28）、外側に拡張するもの（30・33）、内側に拡張するもの（31）、平らにおさめるもの（24・25・27・29・34・36・37）、丸くおさめるもの（22・23・32・35）が認められる。口縁端部を内外にわずかに拡張するものは端部に強いヨコナデ調整を施しており、端部がわずかに窪んでいる。また、26は口縁端部内面をつまみ出すようにヨコナデ調整している。全般的に口頸部が薄く、胴部以下と厚さのあまり変わらないものが多いが、口頸部に比べて胴部がかなり薄いもの（24）がある。逆に全般的に厚手の器壁をもつもの（28）があり、内面はヘラ削り調整の後に丁寧にヘラ磨き調整を行っており、調整の面でも他の甕形土器と異なっている。調整は、外面はヨコナデ調整、内面は口頸部がヨコナデ調整、胴部はヘラ削り調整を施すものが大半である。内面のヘラ削り調整はナデ消すもの（25・27・32・33・37）とそのままのもの（24・26・29～31）がある。文様を施すものはほとんどないが、35は肩部に二枚貝腹縁の連続刺突文を施している。

鉢形土器（第35図38・39）確認したのは2点であるが、実数はもう少し多いと想定される。いずれも小型の鉢形土器で、38は深鉢形で、端部を平らにおさめている。外面はヘラ磨き調整、内面はヘラ削り調整の後丁寧にナデ消している。39は浅鉢形で、外面は指頭調整のちナデ調整で仕上っている。内面はヘラ削り調整のままである。

高坏形土器（第36図62・63）確認できたのは2点のみで、いずれも坏部と脚部の接合部で、小型品と思われる。62は坏部内面が丁寧なナデ調整で、脚部内面にヘラ磨き調整が認められる。外面は丁寧なナデ調整である。63は坏部内面が粗いヘラ磨き調整で、坏部外面および脚部内面がヘラナデ調整、脚部外面にヘラ磨き調整を施

している。

底部（第36図40～61） 基本的に胴部下半から底部にかけての傾斜が急で、直線的な側面形であることから、大半は甕形土器の底部と考えられるが、一部に鉢形土器および壺形土器を含んでいる可能性がある。調整は、外面がヘラナデ調整、ナデ調整を基本とし、内面はヘラ削り調整を基本とし、ナデ消しているもの（40・41・43～45・47・48・52・55・56・58～61）が多い。また、44・48・49・61は外面を丁寧なヘラ磨き調整を施しており、鉢形土器、または壺形土器の可能性がある。いずれも平底であり、上げ底気味のもの（44・54・57・58）が若干認められる。

弥生土器は採集品ではあるが、大半は特定の場所から採集されており、本来、住居跡などの遺構に伴うものと推定される。各器種を通じて文様を施すものはほとんどなく、口縁端部を拡張するものが少ないこと、胴部の調整は外面ハケ目調整、ナデ調整、ヘラナデ調整を基本とし、内面は全体にヘラ削り調整を施していることなどから、大きくは後期後半に位置づけられる。

詳細な時期を検討するため、今一度各器種の特徴をまとめてみる。壺形土器は複合口縁と単口縁がみられ、複合口縁は外面に擬凹線、凹線文を施している。単口縁は口縁端部を平らにおさめている。胴部外面はナデ調整、ヘラナデ調整で仕上げられており、ヘラ磨き調整を施すものはきわめて少ない。甕形土器は口頸部がくの字状を呈し、明瞭に屈曲部を持つものが大半であるが、口縁部の開き方がやや小さいものを含んでいる。口縁端部はわずかに拡張するものと平らに、あるいは丸くおさめるものがあるが、前者もわずかに拡張する程度である。全体的に口頸部、胴部ともに比較的薄手である。胴部外面外胴部上半まで残っているものが少ないため、胴部の調整を十分に把握できないが、縦方向のハケ目調整を残すもの（34）が認められる。他の個体も多くはハケ目調整を施している可能性がある。胴部内面はヘラ削り調整を施すが、ナデ消しているものが多い。鉢形土器は口頸部がくの字状に屈曲するが、口縁部の開きは比較的小さく、口縁部が短い。胴部は直立気味である。口縁端部は平らに、あるいは丸くおさめている。いずれの器種においても口縁端部を大きく拡張するものは認められず、口縁端部に強いヨコナデ調整を施してわずかに窪む程度で、口縁端部に凹線文を施すものは認められない。また、底部は明瞭な平底であるが、胴部最大径に対してかなり小さく、先細り状の底部形態が多い。文様についてみると、いずれの器種でもほとんど無文様で、甕形土器でわずかに二枚貝殻腹縁による連続刺突文が認められる程度である。西条盆地では弥生時代後期中葉以降、いずれの器種においても無文様化が急速に

進行し、同時に口縁端部の拡張度合いが少なくなり、口縁端部を平らにおさめるものの割合が大きく増加して行き、後期中葉後半には基本的に凹線文は消滅している（藤野 2007）。後期後葉には口縁端部を平らに、または丸くおさめる形態が主体となり、甕形土器を中心に口頸部の短小化と口縁部の開き方が小さくなる傾向が認められ、とくに後期後葉後半は顕著である。調整の面では、後期中葉以降、胴部外面はハケ目調整、内面はヘラ削り調整が基本となる。後期中葉では上記の調整をそのまま残すものが一般的であるが、後期後葉になると、内外ともナデ消す例が認められるようになり、とくに後期後葉では顕著となる。

丸山神社周辺で採集された弥生土器の特徴を西条盆地の様相に対比すると、一部に後期中葉後半の特徴を持つものもあるが、おおむね後期後葉の様相に一致し、後期後葉後半の特徴を有するものが多い。また、底部はいずれも明瞭な平底であり、後期終末の様相は認められない。以上のことから、採集の弥生土器は、後期後葉後半を主体としながら、後期中葉後半～後期後葉の時期の中におさまるものと考えられる。

## 6. おわりに

丸山神社古墳群の測量の結果、第1号古墳は、全長約42.9mの前方後円墳で、後円部直径約33.0m、高さ6.5m、前方部長さ16.0m、幅14.2m、高さ約1.8mであることが明らかとなった。後円部東端は削平されており、全長44.1mに復元される。また、第2号古墳は、直径約10.0m、高さ約2.0m、第3号古墳は直径約10.2m、高さ約1.0mの規模である。

丸山神社第1号古墳は、西条盆地では三ツ古墳第1号古墳（全長約92m）、スクモ塚第1号古墳（全長約63m）に次ぐ第3番目の規模であることが明らかとなった。また、これまで本地域においては5基の前方後円墳が知られていたが、これで6基目の例となる。古墳の規模から見て本地域を代表する首長墓と考えられる。

第2節において西条盆地における前期、中期の古墳について概観した。本地域における古墳時代前期の有力首長墓はいずれも高屋地区に位置しており、オケ迫第1号古墳（1期）→原の谷古墳（2期）→白鳥古墳（3期～4期）の順で築造されたと考えられる（括弧内は前方後円墳集成（近藤編1991）の時期区分、以下同様）。オケ迫第1号古墳は高屋地区の西の入口部に立地し、高屋地区を見渡すことができる。同時に西条地区北部も眺望できる。弥生時代後期の大型集落を含む遺跡がもっとも集中する地域であり、支配地域が見渡せる位置に古墳を築造したものと想定される。原の谷古

墳は高屋地区を見渡すことができる丘陵上に立地しているが、西条地区側は基本的に見通すことができない。この時期、西条地区北部にも首長墓が築造されているのかもしれない。白鳥古墳は白鳥山の山頂部に立地し、高屋地区、白市地区のほぼ全域を眺望することができる。古墳の北側はさらに高い山頂部が存在し、高所に立地するものの、西条地区方面はほとんど見渡すことはできない。基本的には高屋・白市地区に向けた立地であり、西条地区側にどの程度支配力が及んだのかは検討が必要である。

中期の首長墓は西条地区を中心に分布する。スクモ塚第1号古墳（5期）→三ッ城第1号古墳（6期）の順で築造されている。スクモ塚第1号古墳は西条地区を一望できる立地であり、内容は不明であるが、その規模や同時期の古墳分布などから西条盆地を統括した首長墓と想定される。三ッ城第1号古墳は西条盆地北部の一部（旧西条町中心部、西国街道四日市宿一帯）のみが眺望できる特殊な立地である。古墳の規模や副葬品の内容などから西条盆地のみならず、安芸地方の広い範囲を統括した首長墓と評価できる。三ッ城第1号古墳以降の首長墓については不明である。

高屋地域では、白鳥古墳に後続する首長墓として千人塚古墳（4期末～5期初頭）がある。高屋地区を眺望できる丘陵上に立地する。副葬品は前期的な様相が窺えるものの、三ッ城第1号古墳につながる内部主体の構造を有している。西条盆地の古墳時代中期古墳の内部主体が箱式石棺を中心とすることなどから、ここでは中期初頭に位置づけておきたい。

最後に、丸山神社第1号古墳の位置づけについて考えてみたい。上述の首長墓系列の中に置くとすれば、丸山神社第1号古墳は白鳥古墳に後続し、スクモ塚第1号古墳に先行する位置を与えておきたい。千人塚古墳との時期的な前後関係は微妙で、同時期の可能性も十分に考えられる。しかし、丸山神社第1号古墳は前方後円墳であること、全長40mを超える規模であることから、白鳥古墳に後続する首長墓で、首長権は西条地区側に移動した可能性がある。スクモ塚古墳第1号古墳との前後関係も問題になるが、大型古墳が西条地区の東縁部に同時期に並立する可能性は想定困難である。丸山神社第1号古墳→スクモ塚第1号古墳→三ッ城第1号古墳の順で首長権が移動したことはおおむね肯首できると思われるが、安芸地方の政治的動向と関連して、それぞれの古墳築造の背景は異なるものと想定される。丸山神社第1号古墳の被葬者を直接的に支える生産基盤は、古墳の西側に広がる丘陵や段丘などに囲まれた低地一帯と想定され、それほど広い範囲ではない。古墳時代前期を通じて西条地区側で生産基盤の向上があったことは十分想定され、そうした状況を背景としている可能性はある。

しかし、高屋地区に比較して西条地区側が特段の生産性が向上したとする根拠は現状では指摘できない。丸山神社第1号古墳は、西条地区北部に位置し、西条地区から高屋地区に通じるルートや三原方面へ抜けるルート、西条盆地南部を経て瀬戸内海へ抜けるルートにも面している。古墳時代中期の政治的動向と関連して、西条盆地中央部に位置するという西条地区北部の重要度が増し、西条地区側に首長権の移動をもたらしたのかもしれない。そうした意味からすると、スクモ塚第1号古墳、三ッ城第1号古墳の立地の特殊性も理解できるかもしれない。スクモ塚第1号古墳は近世以前の遺跡分布の状況などからみて古墳時代中期において周辺部の生産基盤が飛躍的に向上した可能性は低い。スクモ塚第1号古墳に近接して西条盆地から瀬戸内海へ抜けるルートが存在したと想定できる。古代に港が存在したとされる東広島市安芸津町(安芸津)へは蚊無峠を越えるルートが有力で、高屋方面からは丸山神社第1号古墳が位置する西条盆地東縁の丘陵裾伝いに南へ下り、スクモ塚第1号古墳の丘陵裾付近を経てさらにほぼ直線的に南へ下って蚊無峠への入口となる西条町福本付近へ達するのが最短ルートと思われる。三ッ城第1号古墳についてはきわめて眺望不良な立地(東広島市市街地中心部付近からのみ視認できる位置にある)であることはすでに触れたとおりである。三ッ城第1号古墳は、これまで指摘されているように、大和政権の地方経営策と被葬者の政権内における高い地位(脇坂 1995)や安芸地方における政治的結集(古瀬 1991)を反映して築造されたとする想定が行われている。これらの古墳の築造背景についてはさらに検討が必要であり、同一の首長墓系列として捉えることができるかどうかについても現状では検討材料がまったく不足している。今後の調査研究の蓄積を俟ちたい。

以上、丸山神社第1号古墳の西条盆地における政治的な位置をおおよそ推定したが、前期末、あるいは中期初頭に位置づけるかについても多くの議論が必要である。壺形埴輪の組み合わせについては現状では単口縁のみであり、複合口縁が組み合うのか否かによって位置づけも変わるであろう。西条盆地における円筒埴輪の導入は現状では白鳥古墳からであり、3期以降に確認され、本古墳の時期に近いスクモ塚第1号古墳では多くの円筒埴輪が採集されている。一方、丸山神社第1号古墳では檜の下刈りに際して小型重機が利用され、墳丘の一部が削平されていたが、墳丘一帯では円筒埴輪等は採集されていない。本古墳では壺形埴輪を中心とする埴輪の樹立を行っている可能性があるが、同時期の壺形埴輪を出土する古墳では円筒埴輪を伴う場合と壺形埴輪のみで構成される場合がある。本古墳の壺形埴輪の形態や底部の製作状況は円筒埴輪

の影響を強く受けているものと想定されるが、本古墳に円筒埴輪が伴うかどうかは地域的儀礼を古墳祭祀の中にどの程度残しているのかを判断する上で重要である。現状ではほとんど議論を深めることはできないが、本地域における古墳時代前期～中期を考える上できわめて重要な古墳であることは間違いない。

本稿を作成するにあたり古瀬清秀、宇垣匡雅、吉井宣子の各氏から多くの教示を得た。文献収集に際して、石井隆博、宇垣匡雅、野島永、古瀬清秀、増田直人、吉野健志の各氏にお世話になった。また、丸山神社古墳群の測量に際しては、当時の丸山神社宮総代であった沖田利秋氏に便宜を図って頂き、当時の広島大学考古学研究室の潮見浩教授、川越哲志助教授、広島大学埋蔵文化財調査室の河瀬正利助教授に特段のご高配を頂いた。さらに、測量調査に参加した大学院生・学生の努力によって丸山神社古墳群の測量図が完成した。記して感謝の意を表したい。

なお、本稿に収録した丸山神社周辺採集の弥生土器の実測は、藤野次史、八幡浩二（現福山大学）が行い、浄書を山手貴生（現太田市教育委員会）が行った。また、出土資料については吉井宣子氏が保管している。また、第2図の丸山神社古墳群周辺の地形図は東広島市発行の2500分の1地形図を一部改変して使用した。

## 註

- (1) 古墳の名称については仙人塚古墳と記載されている文献が多数ある。しかし、もっとも古い報告例と思われる松崎・潮見 1961 において千人塚古墳とされていること、2010 年の発掘調査報告書（古瀬編 2010）で千人塚古墳とされていることから、ここではそれにしたがっている。
- (2) 前方部の西側に溝が存在するような痕跡は測量調査では確認できなかった。前方後円墳の築造企画については石部らの研究のほかに、沼澤豊の 24 等分法（沼澤 2006）がある。この方法に従えば、前方部の見かけの裾と前方部平坦面の高さはほぼ 1 区画分に相当する。ちなみに、24 等分法でも本古墳の平面企画は 8 等分法と同様の結果である。
- (3) 胴部から底部への移行は連続的で境界は明確ではない。しかし、器壁の厚さに注目すると、胴部上半～中央部付近はほぼ同じ厚さであるが、胴部下半は底部に向けて次第に厚さを増しており、底部との境界と思しき付近で再びほぼ一定の厚さとなっている。粗いヘラ削りおよび指頭調整のため 5mm 程度の厚さの変化はあるが、底部は厚さ 2cm 程度で、胴部との厚さは明瞭である。胴部と底部の作り分けが行われている可能性が高く、胴部を製作した後に底部を製作し付加している可能性が高い。外面からの区分は困難であるが、ここでは底部端付近の厚さが維持されている部分を底部としておきたい。また、器壁の厚さ調整は内面のヘラ削り調整で行われており、胴部に向けて厚さが薄くなり始める付近はおおむね上下のヘラ削り調整単位の境界が認められる。
- (4) 岡山県出土の壺形埴輪には、特殊壺は含んでいない。また、底部の確認できない例も除外した。
- (5) 発掘調査は実施されていないが、円筒埴輪が採集されており、5 期に位置づけられる。古瀬清秀氏教示。

## 引用・参考文献

青山透 1990 「胡麻 5 号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群 I』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第 83 集、(財) 広島県埋蔵文化財調査センター、129～228 頁。

- 阿部滋編 1985 『広島市安芸区矢野町所在岡谷遺跡・狐が城古墳発掘調査報告書』広島市の文化財第31集、広島市教育委員会。
- 石井隆博 1990 「位置と環境」『森信第10号古墳発掘調査報告書』東広島市教育委員会。
- 石井隆博 1993 「丸山神社第3号古墳」『埋蔵文化財調査報告書 福岡山3号遺跡・湯谷迫遺跡・丸山神社第3号古墳・諏訪面遺跡・北古屋城跡・土居の内館跡』東広島市文化財調査報告書第25集、東広島市教育委員会、22～25頁。
- 石井隆博編 2004 『西条中央七丁目史跡三ッ城古墳発掘調査報告書－史跡三ッ城古墳保存整備事業に係る発掘調査－』文化財センター報告書第42冊、(財)東広島市教育文化振興財団。
- 石井隆博・角田徳幸 1995 「広島市安佐北区所在 山武士塚古墳群の測量調査」『芸備』第24集、1～14頁。
- 石部正志・田中英夫・宮川徭・堀田啓一 1979「畿内大型前方後円墳の築造企画について」『古代学研究』89、1～22頁。
- 石部正志・田中英夫・宮川徭・堀田啓一 1980 「帆立貝形古墳の築造企画について」『考古学研究』第27巻第2号、85～102頁。
- 植田千佳穂 1987 「3. 大明地遺跡 (4) まとめ 1. 集落について a. 集落関係の土器の位置付けについて」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第55集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、245～293頁。
- 梅本健治 1982 「八幡山大池古墳」『道照遺跡 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター、4～14頁。
- 梅本健治 1990 「胡麻4号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群Ⅰ(本文編)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、101～128頁。
- 恵谷泰典編 2005 『蛇迫第1～4号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第44冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 大上裕士 1993 「才が迫遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅸ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第115集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、11～44頁。
- 太田史代編 1988 『榎ヶ坪3号遺跡(B地区)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第72集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター。
- 金井亀喜 1975 「木原向山古墳群」『賀茂カントリーゴルフクラブ場内遺跡群発掘調査報告書』広島県教育委員会、36～46頁。
- 河瀬正利 1971 「広島県賀茂郡八本松町藤が迫遺跡群発掘調査報告、第1号古墳」『広島県文化財報告第9集』広島県教育委員会、81～85頁。
- 蔵本晋司 2004 「丸亀市吉岡神社古墳の再検討－供献土器のありかたを中心として－」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要』XI、(財)香川県埋蔵文化財センター、49～107頁。
- 高下洋一編著 2004 『史跡中小田古墳群遺構状況確認調査報告』(財)広島市文化財団発掘調査報告書第9集、(財)広島市文化財団。
- 近藤義郎編 1991 『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版。
- 潮見浩編 1980 『中小田古墳群－広島市高陽町所在－』広島市の文化財第16集、広島市教育委員会。
- 妹尾周三 1993 「浄福寺1号遺跡の調査」『東広島ニュータウン遺跡群Ⅳ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第128集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、55～66頁。
- 竹中克繁 2004 「九州壺形埴輪研究序論－壺形埴輪の変遷とその意義」『熊本古墳研究』第2号、13～32頁。
- 竹中克繁 2006 「古墳時代前期における九州の埴輪」『前期古墳の再検討 第9回九州前方後円墳研究会大分大会発表要旨・資料集』九州前方後円墳研究会、49～62頁。
- 中国四国前方後円墳研究会 2010 「四国北東部の埴輪の様相－讃岐を中心に－」『円筒埴輪の導入とその画期 中国四国前方後円墳研究会第13回研究会』。
- 出野上靖編著 1993 『高屋町中島原の谷古墳・原の谷遺跡発掘調査報告書』文化センター調査報告書第37冊、(財)東広島市教育文化振興事業団。
- 中田高 1989 「西条盆地およびその周辺地域における湖成段丘とその発達過程」『広島大学統合移転地埋蔵文化財調査年報Ⅶ』広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、74～83頁。
- 沼澤豊 2006 『前方後円墳と帆立貝古墳』雄山閣。
- 業杖哲也 1994 「蔵田1号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群Ⅳ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告

- 書第128集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、7～48頁。
- 東広島市教育委員会 1989 『東広島市埋蔵文化財地図Ⅱ(東広島市高屋町分)』。
- 福山市教育委員会 2000 『福山市文化財年報』29。
- 藤岡孝司 1993 「大槓第1号古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』東広島市教育委員会文化財調査報告書第26集、東広島市教育委員会、78～90頁。
- 藤野次史 2007 「西条盆地と広島大学校内の弥生土器」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳーアカデミック西部地区の調査ー』広島大学埋蔵文化財調査室、407～448頁。
- 古瀬清秀 1991 「安芸」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版、89～94頁。
- 古瀬清秀編 2010 『広島県東広島市千人塚古墳』東広島市教育委員会・広島大学考古学研究室。
- 松崎寿和 1979a 「白鳥古墳」『広島県史 考古編』広島県、424・798頁。
- 松崎寿和 1979b 「夫婦茶屋古墳」『広島県史 考古編』広島県、435～436頁。
- 松崎寿和 1979c 「スクモ塚古墳群」『広島県史 考古編』広島県、436頁。
- 松崎寿和 1979d 「三ツ城古墳」『広島県史 考古編』広島県、436～437、809～814頁。
- 松崎寿和・木下忠・豊元国・池田次郎 1954 「三ツ城古墳-広島県賀茂郡西条町-」『広島県文化財調査報告書第1輯、広島県教育委員会。』
- 松崎寿和・潮見浩 1961 「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第1巻 広島市、114～224頁、1961。
- 松本和彦 2010 「四国北東部の埴輪の様相-讃岐を中心に-」『円筒埴輪の導入とその画期 中国四国前方後円墳研究会第13回研究会』中国四国前方後円墳研究会、39～60頁。
- 道上康仁 1985 「大槓3号遺跡」『大槓遺跡群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、34～95頁。
- 三保光成・梅本健治 1994 「中郷2号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群Ⅳ』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第128集、(財)広島県埋蔵文化財調査センター、55～66頁。
- 村上久和 1988 「第1節 勘助野地遺跡 3.まとめ 2)壺形埴輪の変遷」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)』大分県教育委員会、115～124頁。
- 山口譲治・吉留秀敏・渡辺芳郎編 1989 『老司古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第209集、福岡市教育委員会。
- 脇坂光彦 1995 「三ツ城古墳研究ノート」『芸備』第24集、15～23頁。

## A Survey of Maruyama Shrine Mounded Tombs in Higashi-Hiroshima

Tsugifumi Fujino

This paper presents the findings of a survey carried out in 1991 on mounded tombs at the Maruyama shrine in Higashi-hiroshima, Hiroshima Prefecture. There are three mounds. The first is a *zenpo-koenfun* (前方後円墳; keyhole-shaped tomb), while the second and third are *enpun* (円墳; circular mounds). The approximate measurements for the tombs are as follows. The keyhole-shaped mounded tomb has a total length of 44.1 m (restored length); the *koenbu* (後円部; rear circular part) has a diameter of 33 m and a height of 6.5 m, while the *zenpobu* (前方部; front part) has a length of 16.0 m, a width of 14.2 m, and a height of 1.8 m. The second tomb has a diameter of 10 m and a height of 2 m. The third tomb has a diameter of 10.2 m and a height of 1 m. The first tumulus can be dated to between the early 5th century and the 4th century from the collection of the *tsubogata-haniwa* (壺形埴輪; pot-shaped clay figures). The first tomb is the third-largest in the Shiraichi and Saijo basin area, and is a very important mounded tomb in relation to the beginning of the Middle Kofun period in this region. In addition, I discuss the Yayoi pottery that has been collected around the Maruyama shrine.

図版4 丸山神社古墳群と周辺の景観



図4-1 丸山神社古墳群遠景（南より）



図4-2 丸山神社古墳群近景（北西より）



図4-3 丸山神社古墳群近景（北より）



図4-4 丸山神社古墳群よりの眺望（北東方向：東広島市市街地を望む）



図4-5 丸山神社古墳群よりの眺望（西方向：旧円城寺山方向を望む）



図4-6 丸山神社古墳群よりの眺望（南方向を望む）

図版5 丸山神社第1号古墳採集の壺形埴輪

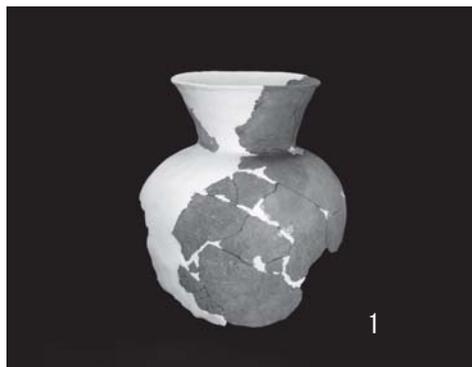


図5-1 第1号古墳採集の壺形埴輪 (1)



図5-2 第1号古墳採集の壺形埴輪 (2)  
(左：外面、右：内面)

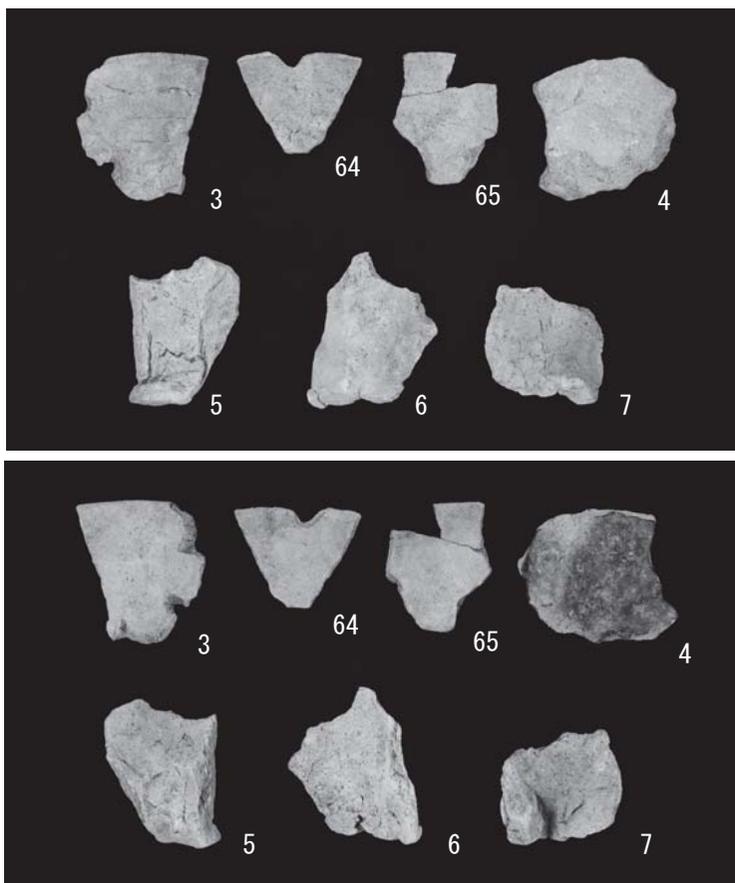


図5-3 第1号古墳採集の壺形埴輪 (3)  
(上：外面、下：内面。写真の番号は第35図に一致する。ただし、64・65は写真のみである。)